Stage Nine
「いつか海に還る日まで」

Stage Nine

「やばいぞ、ランスロット」
「どうしたんだ、いきなり？」
「金がねぇ」
「冗談だろう？」
「いつも金のことなんか気にしちゃいないからな。バルモアであいつらと別れた時にもその話をするのを忘れてた」
「一ゴートもないのか？」
「そうさ。財布を握ってたのはグランディーナだ。カリャオで使った釣りも返しちまったし、その後は使ってない」
「急いで戻れば、エレボスならバルモアを離れる前に彼女たちを捉まえられるんじゃないか？」
「どうせ金はろくに残ってねぇだろう。カリャオで買い物させる時にも、足りなかったら〈何でも屋〉を呼び出せと言ってたぐらいなんだから」
「それだよ、カノープス」
「何だ？」
「あの時、ジャックを呼び出せと言って貸してくれた硬貨を彼女に返しそびれたままなんだ。彼に頼んでみよう」
「背に腹は代えられねぇな」
とは言ったものの、ランスロットも〈何でも屋〉のジャックと話したことがあったわけではない。トリスタン皇子に初めて会った時に馬車に乗せてもらっただけだし、カノープスにいたっては初対面だ。彼が本当に現れるかどうかは二人とも半信半疑であった。
しかし、〈何でも屋〉のジャックは現れた。もっとも呼び出したのがグランディーナではないと知った時の彼の落胆ぶりは非常事態だとはいえ、気の毒だった。
「ジャック殿、厚かましいお願いをしてしまいまして申し訳ありません。ですが、我々はこれから行かなければならないところがあるのです。金は本隊と合流した時に、いえ、先に本隊から取り立てていただいてもかまいませんから、どうか金を貸してください」
〈何でも屋〉は気を取り直した様子で三人を順に眺めたが、その視線はサラディンのところでずいぶん長いこと、止まっていたようだった。
「その話をする前に、あちらのお二人をご紹介して

いただけませんか、ランスロット殿？」
「これは失礼しました」
彼は即座にサラディンを指す。
「あちらがサラディン＝カーム殿です。彼はカノープス＝ウォルフ」
「彼女が自分の指示の届かぬところへ人を出すのは珍しいことですね。しかもたったの三人とは、よほどその方のことを信頼しているのでしょう。あなた方はどなたの指揮で動いているのですか？」
「サラディン殿です。これからカストラート海に行くそうですが、我々も目的は知らされていません」
「なるほど。それではランスロット殿、サラディン殿と話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」
「ええ、どうぞ」
ジャックが近づいていき、事情を察したカノープスと入れ違いになる。
サラディンも彼の視線には気づいていたものと見え、来るのを待ちかまえているようだ。二人の身長はほとんど同じくらいで、同様に細身であった。
先に頭を下げたのはジャックの方だ。
「初めてお目にかかります、サラディン殿。ドヌーブの英雄と名高いあなたとお近づきになれて光栄に存じます。わたしはジャック＝グルーシー＝ジョミニ、通称〈何でも屋〉のジャックと申します。これから、どうぞご贔屓（ひいき）に願います」
「ドヌーブの英雄など、わたしにはすぎた呼び名だ。兄弟子からバルモアを守ることもかなわず、同志は殺されたというのに独りだけこうして生き延びている」
「それは、あなたにはまだするべきことがあるからではありませんか？」
「ラシュディ殿をご存じか？」
「もちろんです。わたしなど、こうして微力ながらあなた方のお手伝いをさせていただいておりますが、光栄なことだと思っておりますよ」
「聞けば、グランディーナがずいぶんそなたの世話になっているそうだ。礼を申し上げよう」
「わたしは人として当然のことをしているまでです。もっとも彼女に対しては、私情が交じっていることは否めません。ところであなた方はカストラート海へ向かわれるそうですね。あちらでは人魚たちに帝国が荷担して、以前よりずっと危険な状況になっています。お金のほかにお役に立てることはありませんか？」
サラディンはしばし天を仰いで考え込んだが、再びジャックの方に向き直った。

「なるべく足の速い船を用意してくれまいか。カストラート諸島は広い海域ではないが、海を渡るのにグリフォンだけでは不安が残る。それと、影のように使える者を一人と、戦い慣れたものを二人、貸してもらいたい」

「船については承知いたしました。タシャウズの港はいまはほとんど使われておりませんが、そちらに待機させておきましょう。ほかの者たちもタシャウズにて合流できればよろしいでしょうか？」

「いいや、その者たちにはファニングからジャービス、トケラウを廻ってマーケサズにて待機してもらいたい。人魚との争いについて、情報を集めさせたい」

「それではあなた方はファニングには寄らないつもりなのですね？」

「そうだ。頼めようか？　我らは天候が良ければ、風竜の月二〇日ごろにマーケサズに着けるだろう」

「承知いたしました。船と人、ご希望のとおりに手配いたします。まずはタシャウズにて、またお会いいたしましょう」

ジャックが一礼し、馬車に乗り込む。

同時にサラディンもランスロットたちの方に近づいてきた。

「我々もタシャウズまで急ぐとしよう。そこからはジャックの船でカストラート海に渡る。それとランスロット、そなたに訊きたいことがある。ともにグリフォンに乗ってくれ」

「わかりました」

いままで、グランディーナとカノープス、ギルバルド、ユーリア以外には手綱を取らせたことのないエレボスだったが、どういうわけかサラディンにもおとなしく従った。それで彼とランスロットがエレボスに乗り、カノープスはシューメーに乗り直して、一行は旅を再開した。

「そなたは解放軍結成のころからいるそうだな。その時からの話を詳しく聞かせてもらいたい」

「承知しました」

三ヶ月前、ウォーレン＝ムーンに持ちかけられた話をランスロットはいまでも細部まで思い出せる。その話を改めてするのは懐かしく、楽しいことであったが、時折相槌を打つだけのサラディンの表情はあまり動くことがない。それにランスロットは、実はウォーレンがグランディーナといつ、どのように出逢い、なぜ彼女をリーダーに選んだのか、詳しい話をろくに聞いていないことを思い出して、少しだけ赤面した。

「〈啓示の彗星〉？」
その名称にサラディンの表情が初めて変わる。
「はい。ウォーレンが彼女をリーダーに選んだのはその彗星のためだったのだそうですが、詳しい話はお恥ずかしいことですがそれ以上、聞いておりません。ウォーレンならばお話しできると思います」
しかし、彼はそれでいいとも悪いとも言わずに黙り込む。その横顔はなぜか厳しい。
「何か気にかかることでもおありですか、サラディン殿？」
「いや、そのことは戻ってからウォーレンに訊くとしよう。それよりもいまは、そなたが解放軍にいて見聞きしてきたことを教えてほしい」
「承知しました。ですが、そろそろフェルガナに差しかかります。今日の宿はそこで取らないのですか？」
「わたしは野宿で構わぬ。それにフェルガナで一泊すれば、タシャウズに着くのは明後日になってしまう。カストラート海はまだ先だ。いまは少しでも先に進んでおきたい」
「わかりました」
それでランスロットはカノープスに合図を送り、辺りがかなり暗くなるまで下りることがなかった。
やがて野宿を始めた時もサラディンは夜営の分担を申し出たが、その負担もランスロットやカノープスより長かったほどだ。
「サラディン殿、昨日の今日です。石化から解かれたばかりのお身体であまり無理をなさらぬ方が良いのではありませんか？」
「案ずることはない。わたしはもともと、あまり眠らぬたちだ。それに十年前の知識では役に立たない。情勢もいろいろと修正せねばならぬようだからな」
「わかりました」
彼の言う修正がどれだけのものであったのかはわからないが、翌朝、サラディンの陣取っていた辺りは地図やら書きつけやらがたくさん書き散らされており、その知識の広大さをわずかなりとも見せつけていた。
そして三人は昨日と同じ組み合わせでグリフォンに乗り、ランスロットは今度はサラディンに質問攻めにあって、かなりの冷や汗をかかされたのであった。
その日の日没後に一行はタシャウズの港に着いた。昨晩、フェルガナで一泊していれば、サラディンの言ったとおり、今日中にタシャウズに着くことはかなわなかっただろう。

約束どおりジャックは船を待たせており、もちろんと言うべきか、船長、航海士、船員二人もついている。
「彼はアレイスです。彼らにはあなたの命令を聞くよう言いつけてありますが戦闘には参加できません」
「かたじけない」
「カストラート海でもお要りの時はわたしを呼んでください。その硬貨があなた方のもとにある限り、グランディーナがわたしを呼び出すことはかないませんのでね」
そんなわけで、船がタシャウズの港を発ったのは風竜の月十二日のことだった。カストラート諸島まではまだ五日もかかる道程である。

船の中でもサラディンの話は止まなかった。むしろ、ランスロットとカノープスに同時に話が聞けることを歓迎してさえいる。そして彼の広範な知識と深い洞察力は、しばしば二人を圧倒したし、彼らの話さないこと、気づいていないようなことさえ言外から読み取ったようだった。
しかし、何と言っても彼を驚かせたことと言えば、ユリマグアスでの一件にほかならなかったし、二人ともそのことは予想してもいた。厳しい表情でサラディンが黙り込んだのは、養い子の身を案じてのことだけではなさそうだ。
「あんたは、あいつの正体を知っているんだろう？どこの誰で、なぜ助けたんだ？」
だが、これもカノープスの予想どおりだったが、彼は首を振った。
「もどかしい話だがわたしも事実を知っているわけではない。それに、トリスタン皇子という旗印を得たそなたたちが、あれの素性を知りたがるのはただの好奇心ではないのか？」
これにはランスロットは返答に詰まったが、カノープスはなお諦めない。
「俺はあいつの生い立ちにはラシュディがからんでいると思っている。解放軍のリーダーがラシュディに縁のあるような奴じゃ、へたすれば解放軍が割れちまう。そんなことのねぇように知っておきたいんだ」
「それぐらいで分裂するような軍がラシュディ殿はおろか、ゼテギネア帝国にさえ勝てるとは思わない」
「あんたはそう言うが、良くも悪くもあいつが解放軍の顔だ。影響力は小さくないんだぜ」
「どちらにしても確信のつかめぬうちはわたしの話せることはない」

「それじゃあ訊くが、あいつの七歳までの記憶を封印したのは何のためだ？」
サラディンは目を細める。
「それ以前にひどく辛いことがあったのだろう、心身ともに衰弱しきっていた。全ての記憶を封印しなければ、あれは生き延びることもできなかったろう」
「それはいったいどのようなことですか？　七歳の少女がどんな目に遭わされたと仰るのです？」
「何があったのかはわたしも知らぬ。いまならば思い出しても子どもの時のような害はあるまいが、決めるのはわたしではない。だが思い出さぬ方が良いこともあるのではないかね？」
「俺はそうは思わねぇが、あんたの言うとおり、決めるのはグランディーナだ、俺たちじゃねぇ。それはそうと、レクサールって奴に心当たりはないか？」
「レクサール？　そのような名は伝説の炎の騎士以外には聞いたことがないな」
「あいつはレクサールって名前の奴を知ってるんだ、それも伝説の騎士なんかじゃなく、もっと身近な存在としてな。あいつの記憶の封印には、レクサールが絡んでいるんじゃないかと俺は考えてる」
しかし彼は頑固に首を振った。たとえ知っていたとしてもそんな素振りも見せはしないだろう。ちょっとした口調や仕草から容易に心中を察しさせないところなど、嫌になるほどグランディーナにそっくりだ。
カノープスがそんなことを考えながら見ていたら、サラディンはおもむろに立ち上がった。二人は話の打ち切り方もよく似ている。
「そろそろカストラート諸島に近づく。危険に備えて、今晩から見張りは我々だけで行うとしよう」
「承知した。順番は昨日と同じでいいんだな？」
彼は黙って頷いてた。

南をゼテギネア大陸、北をガリシア大陸に挟まれた広大な内海カストラート海、そこは古来より人魚の住まう豊かな海域だ。気候も良く、ゼテギネアでは数少ない亜熱帯地方でもある。
この地への人間の進出は古く、オウガバトル以後とも言われるが、人間が住んでいるのはその西寄り、カストラート諸島の大小四〇の島々の一部だけだ。それらの島はアヴァロン島と違って火山はないが、地味が肥えていないことにそれほど違いはなく、オウガバトル伝説の残る地という派手さとは裏腹にカストラート海が権力の注目を集めたことはほとんどなかった。

しかし、ゼノビア王グランの並はずれた長寿が、もともとカストラート海周辺でだけこっそりと囁かれていた噂に拍車をかける。曰く「人魚の肉を食べると不老不死になれる」という根も葉もない与太話である。

旧ゼノビア王国と人魚との仲は悪化していった。そして旧ゼノビア王国が滅亡したいまも、人魚たちを狩ろうとする賞金稼ぎ崩れや海賊上がりは後を絶たない。

ゼテギネア帝国の介入はその後のこととなる。人間と人魚の力関係を引っ繰り返すには十分すぎたろう。

風竜の月十八日、サラディンの命により帆船〈漆黒の涙〉号はカストラート諸島のピトケアン島に着いた。

「六日ぶりの陸地だな」

そう言いながら、カノープスは足下を幾度も踏みしめる。ジャックの所有する帆船だけあって快適な船室だったが、彼にはそれでも陸の方が良かったのだ。それは二頭のグリフォンも同様の気持ちだったろう。

「しかし、なぜ、こんなところに来たんだろう？カストラート諸島の中心はマーケサズ島だと聞いた。帝国が人魚に荷担している不穏な時期とはいえ、サラディン殿の目的はいったい何なのだろうな？」

「そいつはこれから訊いてみるとしようぜ。あれだけ毎日、俺たちを質問攻めにしてくれたんだ。いまじゃ、解放軍の誰にも負けない事情通だろう」

「それもそうだ」

先にランスロットとカノープスを下ろしたサラディンは船長のアレイスと話しているが、辺りにはすでに夕闇が迫っていた。

やがてサラディンも降り、二人と二頭に近づいた。

「これからすぐに出かけたいところがある。グリフォンは飛べるか？」

「狭い船室で飽き飽きしてたんだ。どこにだって飛んでいくさ」

サラディンが頷いたので、カノープスはシューメーの手綱をランスロットに渡す。

「ここから西に三つめの島の南岸に建物がある。そなたの目ならば暗くなる前に捉えることができよう」

「承知」

じきに二頭のグリフォンがピトケアン島を発った。島の西には大小三つの無人島がある。ピトケアン島はカストラート諸島の中でも北西の辺境だ。複雑な海流が豊かな漁場を作り出したが、地味が痩せているため、人口は少ないし、住人も良質な漁港であるピトケアン港周辺に固まっている。

「あんたの言ってた建物は庵でもいいのか？」
「ほかになければそこでよい」
「ピトケアン島の西にあるのは無人島ばかりだと思っていたが、最近はこんなところにまで手を広げてるんだな」
「そうではない。そこは、人里離れて修行したいと願う隠者の住まいだ。そなたの知っているとおり、人が住むのに適したところではないよ」
「隠者？　この前のあんたの話だと大層大事な物があると思っていたんだが、そいつに預けたのか？」
「その話ならばランスロットも興味があろう。降りてから話そう」
「じゃあ、別の話をしようぜ。グランディーナの利き腕は、あんたの見立てじゃどうなんだい？」
サラディンは首を振ったが、そのまま黙り込んだりはせずにつけ加える。
「スコルハティは気まぐれな性質だ。いつ動くようになるのかは誰にもわかるまい」
「まるで知り合いのような口ぶりだな」
「スコルハティがその気まぐれさのためにオウガバトルの時に人にもオウガにも味方しなかったのは有名な話だ。あれほどの力を持ちながら、ユリマグアスの門番などに甘んじているのもフィラーハにその性質を疎まれたためとさえ言われている。グランディーナにもその時の話を聞いたがスコルハティはしばしとしか言わなかったそうだ。それならば、一ヶ月か一年か、わたしに答えられることではない」
「ずいぶん冷静なんだな。あいつのことが心配じゃないのか？」
「わたしが案じたところであれの腕が動くようになるわけではあるまい。わたしが解放軍に参戦したのはラシュディ殿を止めるためだ。無駄なことに思い煩うような暇はない」
「ラシュディってのはそれほどの奴なのか？」
「大陸一の賢者と言われる方にそれは愚問というものだな。わたしの知識も力もラシュディ殿の足元にも及ぶまい」
思わず言葉を失ったカノープスにサラディンは穏やかな笑みを浮かべた。
「案ずるな。たとえわたしの命と差し違えてでもラシュディ殿は止めてみせる。そのためにカストラート海まで来たのだ」
やがて三人は庵の近くに降りたが、先に行こうとするサラディンをカノープスが制した。

「ちょっと待ってくれ。いくら独りで修行したいからって灯りもついてないのはおかしい。何かあったんじゃないのか？」
「そうだな。我々が来たことがわかれば灯りぐらいつけるだろう」
ランスロットもわからないなりに庵を見て、松明に火をつけた。
「それとも、人間嫌いで来客は歓迎していないか。どっちにしても俺たちには望ましい状況ではないな」
「わたしが先に立ちます。サラディン殿は後からお越しください」
「承知した」
「それで、あそこに何が隠されてるんだ？」
ランスロットが振り返り、サラディンとカノープスを不思議そうな顔で見た。
「聖剣ブリュンヒルド、地上と異界を結ぶただ一つの神器だ」
「そんな物を隠者が守っていたのか？」
「しっ！」
ランスロットが剣を抜く。ジャックに金を借りた時に剣がなまくらになってしまった話をしたら、「どうせ倉庫に眠っているだけだ」と言って、スムマーヌスという魔法の剣を譲ってくれたのだ。その刃は常に微少な雷を伴っており、持ち主以外が刀身に触ると痺れ、暗がりでもまとった雷のために刃が見分けられるほどだった。
彼が庵の扉を開けると、後ろのサラディンとカノープスにも立ちこめた死臭と血の臭いが襲いかかった。
ランスロットはそのまま庵に入り、サラディンも続く。カノープスは戸口で立ち止まったが、彼らの警戒に反して、庵の中には倒れた修道僧の死体以外には誰もいなかった。
拍子抜けしたランスロットの脇をすり抜けて、サラディンが死体の側に膝をつく。その動きに無数の蠅が一斉に飛び立ち、三人の顔や手に群がってまた離れた。
「死体を動かしてくれ。彼の下にブリュンヒルドの隠し場所があるようだ」
それで松明をサラディンが持ち、ランスロットとカノープスが死体を表に出した。腐って手足がもげるほどではないが、その拍子に蛆虫が何匹も転がり落ち、二人にディアスポラ大監獄を思い出させる。
「ないな」
床の隠し扉を開けたサラディンが冷静な声でつぶやいた。彼は松明をかざして再度死体に近づくと、粗末

な衣服の前面に空いた穴と傷痕を調べ始めた。
その脇でランスロットとカノープスは埋葬のために穴を掘る。修道僧はサラディンとランスロットの中間ぐらいの身長で、サラディンよりも痩せている。生前は枯れ木のような印象を与える人物だったのだろう。まだ蛆虫に食われていない顔は、いかにもこのような場所で修行をしたがりそうな禁欲的な性格にも見えたが、さすがに死を意識した恐怖に歪んでいる。
「この傷は人魚たちが好んで使う三つ叉槍によるものだ」
群がる蠅を追い払いながらサラディンは海岸に降りていく。ランスロットもカノープスも暗くなったこともあってつい手を止めて彼のすることを眺めていたが、すぐに戻ってきた。
「風と波が痕跡を消してしまったようだ。確かに人魚が上陸したという証拠は見られなかった」
「人魚がこの方を襲ったというのですか？」
サラディンは頷く。
「それは、ブリュンヒルドを奪うためですか？」
「そうと考えていいだろう」
「このおっさんがそんな大事な物を守っていたのか？　あんたのような妖術師だって一人じゃ守り切れないんじゃないのか？」
「そうではない。この庵はあくまで目くらましに過ぎぬ。彼もその前にいた者も、ブリュンヒルドのことは知らなかったはずだ。そうでなければオウガバトルの後、ブリュンヒルドはとうに誰かの手か、いずれかの国に渡っていただろう。だが聖剣はこの地上と異界を結ぶただ一つの神器、権力のため、ましてや私利私欲のために利用されるようなことがあってはならぬ」
「じゃあ、どうしてあんたがブリュンヒルドのありかを知っているんだ？」
その問いにサラディンはわずかに微笑む。
「それはラシュディ殿の知識に感謝せねばなるまい。ブリュンヒルドがここにあるという答えを見たわけではないがな」
砂混じりの土は掘りにくく、ろくな道具がないせいもあって、穴は浅くしか掘らなかった。
素肌をさらしているためにいちばん蠅にたかられたカノープスは、何度もうるさそうに手を振りながら、ようやく遺体を埋め終えた。
「これからどうなさるおつもりですか？　人魚たちに奪われたとあれば、このカストラート海から見つけ出すのは至難のことでしょう」

「人魚との争いが激しくなったのはつい最近のこと、ゼテギネア帝国が介入してからだと〈何でも屋〉のジャックが言っていた。その目的の一つが聖剣にあることは間違いなかろう。だが、彼の傷はどれも三つ叉槍のものだ。ブリュンヒルドの情報を得た人魚たちが独断でここを襲った可能性は高い」

サラディンが先に立ってグリフォンの方へ向かう。

「だけどカストラート諸島にだって四〇も島があるんだぜ。一つ一つ探していたら、話にならねぇし、海は人魚たちの独壇場だ。こうなったら手も足も出ねぇんじゃないのか？」

「人魚たちが独断で行動したのであればそこまで絶望的な状況ではあるまい。アレイスたちに人魚との抗争について、情報を集めるよう頼んでおいた。影ほどの働きは期待できまいが、船員同士、我々よりも話を聞きやすいだろう」

「そんなことまで考えていたっていうのか？」

「物事が己の思いどおりに進むことはほとんどあるまい。わたしはいつも最悪の結果を考えて行動する。これでも十年前、兄弟子に石化されただけで済んだのは上出来だと思っているのだがね」

「それで明日はどこへ向かうのですか？」

「マーケサズに向かう。ピトケアンで得られる情報など限られている。だが、いまはひとまずピトケアンまで戻るとしよう」

「わかりました」

「ひとつだけ教えてくれ」

カノープスの言葉にサラディンは足を止め、シューメーにまたがりかけていたランスロットも彼を見た。

「聖剣が帝国の手に渡っていないとなぜ言える？」

「カストラート海を手に入れることも人魚たちを味方につけることも帝国にはさしたる益はない。ブリュンヒルドを手に入れられればすぐにでも撤退する可能性もあるとわたしは考えている。当然、人魚たちもそのことには気づいていよう。だから独断でブリュンヒルドを奪い、少しでも帝国から有利な支援を引き出せるよう、取引の材料に使おうとしているのではあるまいか。だがこれは楽観的すぎる考えかもしれない。人魚たちがブリュンヒルドを奪ったことを帝国が知るのは時間の問題だろうし、もう知られている可能性も高い。帝国の司令官が誰かは知らぬが、人魚たちがどこまでブリュンヒルドを守りきれるかはわからない」

「だからって、人魚たちが俺たちにブリュンヒルドをほいと渡してくれるとも思えねぇな」

「だが我らには聖剣が必要だ。いまの解放軍の戦力ではこの先も帝国に勝ち続けることは難しかろう」
「カオスゲートを開いた先には何があるんだ？　魔界も天空の島も本当にあるものなのか？」
「その話はブリュンヒルドを手に入れてからにしよう。だがこれだけは確実に言える。天空の三騎士殿は実在するのだ。我らはその助力を仰がねばならぬ」

そんなわけで、ピトケアン港に戻った時には夜もだいぶ更けていた。〈漆黒の涙〉号で出される食事は決して貧しいものではないのだが、人の見えなくなった暗い港は、侘びしい気持ちに拍車をかけるようだ。
「わたしはまだアレイスたちと話したいことがある。そなたたちは先に休んでいるといい。見張りは後で交代してもらうとしよう」
「承知しました」
「俺は今日はエレボスたちと甲板で寝る。船室はもう飽きた」
「それならばわたしもつき合おう。万が一のことを考えたら、ばらばらになっていない方がよさそうだ」
ランスロットとカノープスがそれぞれ見張りに起こされたのは、合わせても夜明け前の数時間足らずのことだった。サラディンはウォーレンと同年代とは思えないほど精力的に動き、寝る間も惜しんで働いているが、無理しているようにも見えないのである。
「俺はウォーレンを怠け者だと思ったこともねぇが、サラディンを見ているとそう見えちまいそうだな」
「ウォーレンは内省的な人だからな。だが、ああしたサラディン殿だからこそ、ゼテギネア帝国に十四年間も抵抗することができたのだろう」
「そいつは一理ある」
ウォーレンはともかく、いまは自分たちが怠け者に見えるだろうと思いながら、ランスロットはそのことを口にしないでいた。
けれど、マーケサズまでの行程では二人ともすることがないのも事実だ。〈何でも屋〉のジャックが貸してくれた帆船は、船長以下船員たちだけで動くので、門外漢の二人が頼まれるような用事もない。カノープスよりも船に慣れているとはいえ、ランスロットのそれはせいぜい手漕ぎの舟だ。
しかし、タシャウズの港を発って以来、順調な旅を続けてきた〈漆黒の涙〉号が何かにぶつかったような衝撃で大きく傾いだのは昼も廻ったころのことだった。

カノープスは滑って帆柱にぶつかったが、ランスロットは船縁に手をかけて難を逃れた。
「いってぇー！」
「大丈夫か、カノープス?!」
返事をするより早く、船の前方が騒がしくなり、二人は顔を見合わせる。
「ちくしょう、どこのどいつだ？」
さらに船に体当たりする振動が伝わってきた。
〈漆黒の涙〉号は完全に停船している。
カノープスが飛び上がるとグリフォンたちも続いた。ランスロットもスムマーヌスを抜いて船首に走った。
雷が落ちたのはその時だ。
ランスロットにはスムマーヌスの雷もひときわうるさくなったような気がした。
船首に立っているのはサラディン一人きりだった。カノープスと二頭のグリフォンは上空で戦局を見下ろしている。
「まだわからぬか。我らはカストラート海の人間ではない。そなたたちが退かぬと言うのならわたしも容赦はしないぞ」
「くっ！　仲間の仇はきっと取る、覚えていろ！」
「待て！」
カノープスが逃げ出した人魚とオクトパスを追おうとしたが、彼の視力を持ってしても海中に深く深く沈んでしまった者を追うことはできず、甲板に降りたと思うとすぐに飛び立った。
「どうしたんだ、カノープス？」
「こいつ、まだ生きてるぞ！」
「船に上げてくれ。気絶しているだけだと思うが、具合を診ておこう」
カノープスが人魚を抱きかかえて甲板に上がってくる。濡れているせいもあるのだろうが、赤紫色の尾と同じ色の長い髪が宝石のように陽の光に輝いていた。
膝をついたサラディンが人魚の腕を取った。彼女は傍目には怪我はしていないようだ。
「どういうことなんだい、こいつは？」
「人魚たちに襲われたから撃退したのだ。手加減はしたつもりだったが、あの人魚は仲間が殺されたと思ったのだろう」
「船が引っ繰り返ったかもしれねぇっていうのにずいぶん余裕だな」
「そのようなことにはならなかったろう。〈何でも屋〉のジャックの船はオクトパスの体当たりで横転するようなひ弱な物ではあるまい」

「人魚たちは何で襲ってきたんだ？　あんた、さっき、勘違いのような言い方をしていなかったか？」
サラディンは頷き、アレイス船長に船をマーケサズに向けるよう指示をした。
「そなたの言うとおりだ。彼女らは我々をカストラート海の者だと思ったらしい」
「迷惑な話だな。だいいち、カストラート海の連中がこんなに贅沢な船なんか持ってるかよ」
「人魚たちにはその判断はできなかったのだろう」
「だけど、こんな状況でマーケサズに行ったらもっと危ないんじゃないのか？　人魚ぐらいなら、あんた一人でも撃退できるかもしれねぇが、帝国の連中だっているんだろう？」
しかしその時、人魚がうめき声を上げて目を開けたかと思うと次の瞬間には金切り声で悲鳴を発した。
「きゃーっ!!　お姉様、助けて！　殺される、あたし、殺されちゃう！」
「いい加減にしろ！　いてっ！」
自分の耳を塞ぐより人魚の口を塞ぐ方が早いと思ったのだが、カノープスは手を思い切り噛まれて慌てて引っ込めた。
「助けて助けて！　あたし、水がなくちゃ駄目なの、ひからびて死んじゃう！」
「そう騒ぐな。水がないと生きられないとは言ってもそなたを水から上げて、そう経っているわけではないのだ」
「なによ、なによぉ。あたしたちを殺そうとしたくせに、なんだっていうのよぉ！」
人魚の金切り声はかなり耳にいたい。解放軍のかしまし娘たちもさすがにこれほどの高音では騒がない。何より彼女には遠慮というものがないのだから、自分の置かれた立場も顧みずに騒げるのだろう。
「仲間は無事だが彼女はそなたが殺されたものと思って逃げてしまった。そなたも逃がしてやろう。だがその前に、わたしの問いに答えてくれ」
人魚はその大きな澄んだ碧い目をさらに大きく見開いて、サラディンをしばし凝視した。
まるで異な者でも見るような目つきだ。そう思ったランスロットは、カノープスも同じことを考えているらしいのを悟った。
「あたしを逃がしてくれるの？」
「そなたがわたしの訊くことに答えてくれればな」
人魚は起き上がると両腕だけで後ずさった。だがあいにくと、彼女の後ろは壁だった。

「あなたたちはカストラート海の人間ではないと言ったわ。それならばどこから来たと言うの？」
「無論、ゼテギネアから。我々は帝国と戦う解放軍の者だ」
「まぁ！　それならば、やっぱりあなたたちも悪い人間なんだわ。だって帝国はあたしたちのためにカストラート海に来たのだもの、人間たちを追い出して、人魚だけの王国を作ってくれるのだもの」
カノープスは思わず馬鹿な、と言いかけたが、サラディンに目で制された。だいたい質問しようとしたのは彼の方のはずだったのに、いつの間にか人魚のおしゃべりに応答している有様だ。
「そのようなことはそなた一人の考えではあるまいな。誰に言われたのだ？」
しかし彼女は唇を固く結んで頭を素早く振った。
「それにカストラート海の人間もただでは追い出されまいし、そなたの言う人魚だけの王国ができるまでに何年もかかるだろう」
「あたしたちはあなたたちよりずっと長生きだわ」
「だが人間は、そなたたちより数も多いし、増えるのも早い。人間も大勢殺されようが、そなたたちも仲間を失うことになろう。人間は黙って追い出されはすまいし、万が一、人魚だけの王国が作られても、人間が戻ってこないという保証は誰にもできまいよ」
人魚は答えずにサラディンを睨みつけた。大きな碧い目は心なしか潤んでいるようにも見える。
「あなた、すごく意地悪だわ。なぜ、そんなことばかり言うの？　お姉様の言ってたとおりだわ。人間は意地悪ばかり言うわ」
「わたしもそなたたちが信頼している帝国の者も同じ人間だ。人間のことは、そなたたちよりもよく理解しているつもりだ」
「嘘よ！　ポルキュスさまは言ったわ、ゼテギネア帝国の女帝エンドラの使いが約束したって。人魚を助けて、カストラート海の人間を追い出して、あたしたちだけの王国を作るって約束したのよ！」
「ポルキュス、それが、そなたたちの長の名前か？」
その問いに、人魚ばかりかランスロットもカノープスも驚いてサラディンを見た。けれど、彼女はたちまち震え出し、とうとう堰が切れたように激しく泣き出してしまったのである。
「なるほど。それが、あんたの聞きたかった情報というわけだ。それにしちゃあ、ずいぶんと回りくどいやり方をするじゃねぇか」

「ふつうに訊ねても答えてもらえぬと思ったのでな。だが、エンドラの使いについては彼女は知らなかろう。先ほどのニクシーならば聞いていたかもしれないが、ポルキュスが二人きりで会った可能性も否定するわけにはいかないからな」

「嫌いよ！　人間なんて大嫌い！　あなたたち、ずるいわ、最低だわ！」

人魚の金切り声はかん高くて耳に痛い。彼女に近い方の耳に栓をしながら、カノープスは話を続ける。

「それなら、彼女は逃がしてやってもいいんじゃねぇのか？」

人魚のわめく声が一瞬止んだが、彼女はすぐに「信じないわ」と叫び始めた。

「このまま連れていこうっていったって、水が要る。樽でもあればいいだろうが、海じゃ淡水は貴重だろう？　どうせ、あんたの聞きたいことは聞いたんだ。これ以上、引き止めて心証を悪くするよりもましだと思うんだがな」

「そなたの言うとおりだな。手間をかけてすまぬが、海に降ろしてやってはくれまいか。あるいはまだ、先ほどの仲間がいるかもしれない。アレイスに船を止めるよう頼んでこよう」

「わたしが行ってきます」

「了解っと」

ランスロットは素早く立ち去り、カノープスが差し出した手を大きくはたかれる音を耳にして振り返った。

「やめて！　あたしに触らないでよ！」

「こっちはあんたを逃がしてやろうとしてるんだ。少しはおとなしくしててくれねぇか？」

「どうして？」

ランスロットがサラディンの言を伝えると、船長はすぐに了承した。〈漆黒の涙〉号は大海原に停船する。

「そなたから聞きたいことは聞いた。ならば、わたしは約束を守るべきだろう」

彼女はそんなことは考えてもいなかったようだ。

その隙をついてカノープスは人魚を抱き上げ、海面に降ろした。甲板にいたあいだに彼女の尾は乾いてしまっており、赤紫色の輝きは褪せていた。

しかし、尾の先から海に滑り落ちた人魚は、一回海に潜り込むと、すぐに海面に顔を出し、カノープスを手招いた。

「何の用だ？」

先ほどはさんざんに泣きわめいていたのが嘘のようにすっきりした顔をしている。

「あなたたちの名前をまだ聞いていなかったわ」
「そういう時は、まず自分から名乗るものじゃねぇのか？」
「あら、あたしたちのあいだでは質問者が後から答えるのが礼儀にかなっているのよ」
「なるほど。どういう風の吹き回しか知らねぇが、覚えておくよ。俺はカノープスだ。あんたと主に話していたのがサラディン、もう一人がランスロットっていうのさ」
「あたしの名前はリエッシーよ。あなたたちのこと、覚えておくわ。約束を守った人間は初めて見たのだもの、みんなに話したら、きっとびっくりするわ。それじゃあね、カノープス！」
「待てよ、リエッシー！」
しかし、彼女は即座に潜ってしまい、すぐに彼の視界からも失せた。さすが、「グルーザの愛娘」と言われるだけのことはある。海において人魚たちにかなう者などありはしないのだ。
「せっかちな奴だぜ。俺はバルタンだって言おうと思ったのに聞こうともしねぇんだから」
「カノープス、船を出すぞ」
「いま、行くよ！」

彼が船に戻るや否や、船は再び動き出した。カノープスの視力は、行く先に近づいている島を捉える。
「彼女と何を話していたのだ？」
「名前を聞かれたんだ。彼女の名前はリエッシーっていうんだと」
「それは大した前進だな。彼女を逃がしてやった甲斐があるというものだ」
「カストラート海にはろくな人間がいないらしいぜ。約束を守った人間は初めてなんて言われたら、こっちの方が驚かされる」
ランスロットは眉をひそめたが、サラディンは苦笑いを浮かべた。
「カストラート海の人間、というよりも人魚たちを狩る者や商人たちにそういう者がいなかったということだろう。その判断は短絡的に過ぎよう」
「なるほど」
「それよりも、そなたたちはカストラート海に来るのは初めてであろう？」
「仰るとおりです」
「有翼人は海に用はねぇからな。潮風で羽根は傷むし、泳げるわけでもなし。砂漠ほどじゃないが、海は俺たちの天敵みたいなものだ」

「なぜ海よりも砂漠の方が具合が悪いんだ？」
話を切るのはサラディンに悪いと思ったが、つい好奇心に負けてランスロットは訊く。
「砂の小さい粒が羽根に混じり込むんだ。俺たちの羽根からは水を弾くように油分が分泌されるんだが、砂はそいつを台無しにしちまうのさ」
「だが、アラムートの城塞の西側は、旧オファイス王国の砂漠地帯だ。そこを越えなければゼテギネアにはたどり着けないぞ」
「そんなことは知ってるさ。翼をできるだけ覆って、飛ばないようにおとなしくしているしかないな」
「グリフォンやコカトリスにも君たちのような翼があるが、砂や海には弱いのかな？」
「そうでもねぇらしい。あいつらの翼の方がずっと頑丈にできているんだろう」
「そろそろ話をしてもかまわぬか？」
「申し訳ありません、サラディン殿」
「いいや、わたしも興味深く聞かせてもらった。そなたをカストラート海に連れてきて、すまなかったようだな」
「それほど繊細でもないさ。それに、グランディーナに約束しちまったからな。あいつの腕には遙かに及ばないが、剣ぐらいにはなってやるって言ったんだ。それで、あんたの話というのはなんだ？」
「現在のカストラート海の状況を少し、話しておこうと思ったのだ。この先も三人で行動することはないかもしれない。一人になった時に自分で判断しなければならないこともあるだろう」
ランスロットはもとよりカノープスも緊張した顔つきになった。帝国相手に数の不利はいつものことだが、今回はいつにも増して少ない。判断のまずさは己の死に直結しかねない。
だがサラディンはいつもと変わらぬ調子で話し始めた。ゼテギネア帝国が人魚たちに荷担しているが本格的な戦争には陥っていないこと、帝国の参入は狩りを止めさせるほどだったこと、などである。
「より詳しいことはマーケサズで合流するジャックの部下たちに聞けるだろう」
「狩りが止まったって言ったって、いままで好き勝手に人魚を狩ってきた連中がてめぇが同じ立場に立たされたもんでびびってるだけじゃねぇのか？」
「それほど単純な話ではなさそうだ。アレイスたちが聞いたところでは人魚を狩っていた者たちよりももっと確かな戦力がありそうだ」

「しかしサラディン殿、帝国がすでに人魚たちに荷担している以上、考えられる戦力など、このゼテギネアの外にしかないのではありませんか？」
「あり得ぬ話ではないが、ゼテギネアを狙うのであればカストラート海から手を着けるのは見当違いも甚だしいと言わざるを得まい」
「足がかりにされる恐れはないでしょうか？」
「まったくないとは言い切れないが、可能性は低いだろう」
「ランスロット、おまえもゼテギネアを離れていたことがあるのか？」
「これでも傭兵歴は長いんだ。あのままバルナにいてはわたしもウーサーに殺されていたかもしれなくてね。もっとも、ウォーレンの手引きで逃げられたのはわたし一人だけで、一族は皆、処刑されてしまった」
「そいつは悪いことを聞いちまったな」
「わたしにはもう済んだことさ。それにウーサーと戦った時にわかったんだ。長いあいだ、まるでジャイアントのように思っていた仇が、本当はとても小さかったということにね」
「そのとおりだ」
しかし、黙りこくったサラディンは二人の話もまるで耳に入っていないようで、厳しい顔をして考え込んでいる。
「どうかなさいましたか、サラディン殿？」
「いいや。おそらく、わたしの思い過ごしだろう」
「もったいぶらねぇで話してくれてもいいんじゃねぇのか？　可能性が無でないのなら、俺たちも警戒しておいた方がいいと思うんだがね」
カノープスの言葉に彼は穏やかに微笑む。
「グランディーナも同じようなことをしたか？」
「ああ。一回、説教してやったぐらいだが、あいつのことだ、またやらかすだろう」
「良かろう。どうせそなたたちにも無縁ではなくなった相手だ」
「て言うと、まさか？」
「そのまさかだ。いくら転生用の身体を用意してあったとしても、自らの意志に反した転生だ、これほど早く復活することはあるまい。それにバルモアで会ったのは確かにアルビレオ殿であった。だが、その可能性をまったく否定してかかるわけにもいかない。だから、思い過ごしだろうと言ったのだ」
「そいつも、あんたには最悪の想定のうちなのかもしれねぇが、つくづく因果な性分のようだな」

しかしサラディンは微笑み返しただけで、その話を一方的に打ち切ってしまった。

「もう一つ寄りたいところがあるのだが、カストラート海の状況を把握せぬうちは後回しにせざるを得まい。だが、わたしたちは帝国の後手にまわってしまっている。選択肢は多くなかろう」

ピトケアン島からマーケサズまでは日の出とともに発てば日没直後ぐらいには着く距離だ。パペーテ島、マルデン島の西を進み、〈漆黒の涙〉号は水平線に陽が沈んでいくのに追われながら、マーケサズ港に入った。

「サラディン殿！」

マーケサズはカストラート諸島でいちばん大きな町だが、夕方というせいもあってか港には三人しかおらず、その漁師らしからぬ見知らぬ人物は、船が碇を降ろすよりも早く駆け寄ってきた。

三人で話した後はずっと船室にいるとばかり思っていたサラディンがいつの間にか甲板に出ており、船が港に停泊するなり、真っ先に降りる。

「〈何でも屋〉のジャックの命令でここでお待ちしておりました。セダンダといいます。彼らはローベックとクージュラージュです」

セダンダは控えめそうな印象の目立たない若者だ。ランスロットもカノープスも、ふとアラディのことを思い出して、どちらからともなく苦笑いを浮かべる。彼もいつの間にか解放軍では古株の一人になってしまったが、影をやっている方が珍しいような優男だからだ。もっとも当人は影以外の仕事など思いもつかないらしく、最近では影たちの取りまとめを押しつけられながら愚痴を漏らすこともなく働いている。

一方、ローベックとクージュラージュはいかにも戦士らしい武器を身につけていた。

「よく来てくれた。わたしがサラディンだ」

「はい。ですが、報告の前によろしいでしょうか。実は、この町の中央広場で、捕らえられた人魚が殺されかかっているのです。ご興味があるのではありませんか？」

「何だと?!」

カノープスはつい身を乗り出し、セダンダの胸ぐらを引っつかんだ。

「そいつはいったいどういうことだ?!」

「に、人魚たちが漁船を襲ったんです。それで漁師たちが一人、殺されたんですが、人魚たちも返り討ちにされました。でも一人だけ捕まえられたんです」

「自分たちはさんざん人魚を狩っておいて、仲間が殺されたら殺すだなんて勝手なこと言ってやがる。カストラート海でいったい何人の人魚が殺されたと思ってるんだ？」

「だがそなたとて、その数を正確に知っているわけではあるまい。感情論に感情論をぶつけても相手を説得することはできないぞ」

憎らしいくらいに冷静な言葉はカノープスの頭に冷水をぶっかける程度には役に立ったし、ランスロットも思わず自分の意見を述べるのは手控えたほどだ。

「だからといって、このまま見逃していいなんて言い出しゃしねぇだろうな？」

「わたしは腑に落ちぬ事件だと思っている」

「どういうことだ？　ゼテギネア帝国って後ろ盾を得た人魚たちが、とうとう痺れを切らして人間を襲ったんだとは思わねぇのか？」

「それほど単純な事件ではなかろう。人間を襲うほどの力を持った人魚は、そなたたちも知っているようにマーメイドやニクシーをリーダーとする戦闘部隊だがその戦力は侮れぬ。むしろたかが漁船などに容易に撃退できる相手ではないはず。最近の不穏な動きに備えて漁船に用心棒でも乗り込ませていたのか、あるいはもっと別な理由があるのか気になる。それに我々も襲われたことを忘れるな。二つの事件は決して無関係ではあるまい」

ランスロットとカノープスは思わず顔を見合わせる。人魚の戦闘部隊のことは二人とも知っていたが、サラディンの言うような理由も、自分たちが襲われたこととの関連性も考えていなかったのだ。

「帝国の目的が聖剣以外にあるのかもしれないし、このような事態を想定したからアルビレオ殿の存在を疑っている。いまに始まったことではないが彼の他者の命を軽んずるやり方には虫酸が走る」

「それでは余計、アルビレオのやろうとしていることを止めなければならないのではありませんか？」

「カノープス、そなたがその人魚を助けよ。そしてそのまま、人魚たちの住処に案内してもらうように仕向けるといい。このような状況になっては彼女らはたとえカストラート海や帝国の者ではなくても人間には容易に心を開くまいが、バルタンであるそなたならば、受け入れられる余地もあるだろう」

「俺に影をやれっていうのか？」

「それほど大袈裟なものではないが、直接行動を含むだけにより危険でもあるぞ。帝国の目的が何であれ、

人魚たちを利用しようとしているのは間違いあるまい。そなたはブリュンヒルドの行方を捜してくれ。帝国に先んじて我々が聖剣を手に入れられれば、人魚との全面的な対決は避けられるかもしれないし、帝国の矛先も人魚からは逸れよう」

サラディンの言葉にカノープスは驚きを隠せなかったが、答えるのに躊躇することはなかった。

「わかった、やってみようじゃねぇか。そういうことならば俺は先に行く。

ランスロット！　後を頼むぞ」

「君こそ気をつけて行ってくれ！」

「心配するな！」

カノープスは素早く上空に飛び上がった。

大陸の町々に比べるとせいぜい二階建ての家ばかりが並ぶマーケサズでは、視界が開けるにはそう高く登る必要がない。それに彼の優れた視力はすぐに中央広場を見つけ出した。

猫の額ほどの広さしかないが、町中の人間が集まっていそうな人だかりがして、その中心で柱に縛りつけられた人魚の尾が残りわずかな陽光に煌めいている。

わざと翼を大きく広げたせいもあったのだろうし、夕陽を負ったことも効果的だったのだろう。彼に気づいて人が動いた。人魚を囲むぎりぎりの大きさだった人の輪がカノープスを避けるように広がって、彼は余裕を持って降り立つことができた。

「何者だ、おまえは？」

「俺か？　俺の名はカノープス＝ウォルフ、風使いのカノープスっていったら、大陸じゃあちょっとした有名人なんだがな」

「あいにくだったな。ここはカストラート海だ、大陸の事情なんてものに興味のある奴はいねぇよ」

「そうか」

カノープスは言うなり、人魚を縛りつけていた縄を引きちぎった。

「何しやがるんだ？」

人魚がくずおれ、カノープスは彼女を抱き上げる。けれどその身体は予想していたよりもずっと重く、彼は足腰に力を入れて踏ん張り直さねばならなかった。

「あんたらは大陸の事情には興味がねぇんだろう？　だったら口を出さねぇでくれよ、これが俺たちのやり方なんだ」

「なにっ？」

その時、広場の入り口にサラディンたちの姿を認めて、カノープスは軽く片目をつぶってみせた。

だが、そこへ思いもよらず鋭い声が飛んでくる。
「だまされるな！　そいつは反乱軍の賞金首だ!!」
「なんだと?!」
声の主を彼は素早く捜す。漁師風の目立たない男だが、漁師にしては色白だ。サラディンもカノープスの視線に気づいた様子ですぐに頷いた。
そのあいだもカノープスに浴びせられる怒号は続く。
「反乱軍がカストラート海に何の用だ?!」
「帝国ばかりか反乱軍まで人魚に味方するのか？」
「人間を裏切るつもりか？」
「そうだ！」
「薄汚い裏切り者め！」
「そうだ！」
「うるせぇ!!」
カノープスは翼を広げ、思い切り怒鳴り返した。それで縮まりかけていた人の輪がまた広がる。
「さんざん不老不死なんて噂に振りまわされて人魚たちを狩ってきたおまえらが仲間が殺されたからこいつを殺すなんて偉そうなことを言える立場か?!」
「黙れ！」
「そいつをどこに連れていくつもりだ?!」
「止めろ！」
「反乱軍だか知らないが、一緒につるし上げろ！」
「そうだ！」
「そいつは賞金首だ！」
「一緒に捕まえろ！」
「そいつも殺せ！」
「そうだ、そいつも殺せ！」
「二人とも殺せ！」
「そうだ!!」
「殺せ！」
「殺せ!!」
一斉に伸びてきた無数の手をくぐり抜け、カノープスは素早く飛び上がる。自分を見上げる憎悪の眼差しには、さすがの彼も背筋が寒くなった。
腐った果物や生卵、果ては石つぶてまで投げつけられたが、彼はたちまちのうちにそうした投射物の届かない高みまで登っていった。けれどマーケサズは広い町ではない。ぐずぐずしていたら、追いつかれるのも時間の問題だろう。
しかし、腕の中の人魚は気絶しているためもあって異常に重たい。乾ききった鱗は鈍い金色だが、いまにも一枚一枚剥がれ落ちてしまいそうだ。
「こいつ、ニクシーか」

人魚は種族全体が水の女神グルーザとの結びつきが強いが、その中でも水を操ることに長けた者をマーメイドと呼ぶ。人魚の寿命は四〇〇年近く、人間のおよそ三倍の寿命を持つ有翼人よりさらに長い。二〇〇年以上生きたマーメイドは、「グルーザの愛娘」という愛称にふさわしく、より女神との結びつきも強く、操る水は魔術師並みの威力を持つようになる。そうしたマーメイドはニクシーと呼ばれる。人魚の尾は赤紫色の鮮やかな鱗に覆われており、水中ではまるで宝石のように見えるが、ニクシーの尾からは赤紫色が抜けて鈍い金色になるのだった。

その時、ニクシーがうめき声を上げ、弱々しく目を開けた。

「エゲリア？　サルナ？　ここは、どこ？」

「待っていろ。もうじきあんたを海に戻してやれる。あと少しの辛抱だ」

「あなたは誰なの？　有翼人がどうして？」

「説明は後だ。助かりたかったら、いまはおとなしくしていてくれ」

「わかったわ。でも、せめてあなたの名前ぐらい教えてちょうだい」

カノープスは驚いてニクシーを見たが、彼女が微笑みかけたので自分も笑い返した。

「人魚の礼儀だと質問者が後から答えるんだっけな。俺はカノープス、風使いのカノープス＝ウォルフだ」

「よく知っているわね。私はメリアーよ」

無人の岩場に降り立ち、メリアーをそっと海面に下ろす。尾が水につかるとニクシーは文字どおり水を得た魚のように生気を取り戻し、彼の腕から水の中に滑り降りた。

「メリアー！」

カノープスの呼び声に応えるかのようにニクシーは大きく海上に跳び上がり、水しぶきを跳ねらかした。

「ああ、生き返るようだわ！　ありがとう」

水に濡れた髪が鱗と同じ鈍い金色に輝く。ニクシーを見るのはこれが初めてだったが、傷ついているとはいえ、メリアーはなかなかの美人だった。

「悪いな、俺じゃあんたの傷は治してやれない」

「気にすることはないわ。私たちには海にいることが何よりの薬だもの」

けれど、メリアーの表情が急に沈み込んでしまった。

「でも、私たち、失敗してしまったわ。エゲリアもサルナもアペーモシュも殺されてしまって、ポルキュスさまが悲しまれるわ」

「ポルキュス？　あんたたちの長の名前かい？」
メリアーは頷いた。それはリエッシーから聞き出した話と合致する。彼女はポルキュスのところまで無事に帰ったろうか。
人魚たちは人間や有翼人とはほとんど交渉を持たずに暮らしている。マーメイドやニクシーの存在や特徴的な鱗の色などのことは、皮肉なことに人魚狩りの過程で知られてきたものだ。しかしそのなかでも、人魚たちの主な住処と一族を率いているであろう長のことはほとんど知られていない情報である。
つまり人魚たちが独断でブリュンヒルドを奪ったのならば、その命令を出したのはポルキュスである可能性が高いのだった。
「そういえば、ここら辺の海で有翼人は珍しいわね。あなたはなぜカストラート海に来たの？」
「捜し物さ。聖剣ブリュンヒルドを探しに来たんだ。あんた、知らないかい？」
「あなたがブリュンヒルドを？」
メリアーは少し警戒するように彼を見た。カノープスは軽く肩をすくめてみせる。
「あんたは気絶していたから聞いてなかったかもしれないが、俺は帝国が反乱軍て呼んでる、解放軍の一員だったのさ」
「だったとはどういうことなの？」
「捕まってたあんたを助けるの助けないのって、一悶着あって、やめてきたばかりなんだ」
「やめてどうするの？」
「実はまだ考えてない。このまま傍観者になるってのも性に合わねぇが、帝国の味方をするのも真っ平ご免なんでね」
彼女はしばらくカノープスを凝視していたが、やがて微笑んだ。
そのころになると夕闇はずいぶん濃いものになっており、互いの顔が見分けられなくなるのももうじきのことと思われた。
「何と言ってもあなたは私の命の恩人だわ。どうかしら、あなたをポルキュスさまに紹介したいのだけれど、私と一緒に来てくれない？」
「俺があんたたちの仲間にかい？」
「それを決めるのはポルキュスさまだけれど、私、あなたのような勇敢な男性が好きなの」
「そいつは光栄だね、メリアー」
「それじゃ、決まりね。明日の朝、発ちましょう。ここからだとマーケサズ島の北側を迂回していくよう

だから二日ぐらいかかると思うわ。どちらにしても今日はここで野宿するようね」
「野宿には俺も慣れてるが、あいにくと食糧は持ってないぜ」
「私に任せて。魚でよければ捕ってきてあげる」
彼がいいとも悪いとも言わぬうちにメリアーは海に潜ってしまった。その姿に多少の罪悪感を覚えつつ、カノープスは改めて岩場に腰を下ろす。
「こういうことは得意じゃねぇんだが、乗りかかった船だ、腹をくくるしかなさそうだな。それにしても、たとえ俺が人魚たちの本拠地に着いたってサラディンたちにどうやって連絡をとればいいんだ？」
しかし、彼はすぐに頭を振る。
見上げると、空にはいくつもの星が瞬き始めていた。

「あいつも反乱軍の賞金首だぞ！」
鮮やかに離脱したカノープスを見送る間もなく、ランスロットは人びとの注目が一斉に自分たちに集まったことに気づいた。
「そいつらもカノープスとやらのお仲間か？」
「捕まえろ!!」
「そいつらも裏切り者だ！」
「カノープスの代わりにそいつらを吊せ!!」
しかし、二人はすぐに捕まえられなかった。物騒なことを言っている者も混じってはいたが、単に調子を合わせているだけでいざとなるとほとんどの者は武装した彼らに手を出そうとはしなかったからだ。
それでもランスロットは念のためにサラディンを庇った。三人でカストラート海に行くと決まった時から、彼はサラディンの剣に、あるいは楯に徹するつもりでいたのだ。
「そなたは何者だ？　勇ましい言葉で皆を煽っているが、そなたはカストラート海の者ではあるまい？」
そう言ってサラディンが指したのは、身なりこそ漁師らしいが、周囲の者よりも肌の色の薄い男だ。
離脱する前にカノープスが群衆を見たが、ランスロットにはそれが彼かどうかはわからない。
だんだん夕闇の迫る広場で、多くの者が振り返って彼を見た。
「だまされるな！　そいつらは反乱軍の一員だ！」
「そうだ。我々もそのことを否定するつもりはない。だが、先ほどそちらの者が大陸の事情に興味はないと言ったな？　我らが賞金首であることがそなたたち、カストラート海の者にどう関係があると言うのだ？」

「ごまかすな！　おまえたちが平和を乱しているんじゃないか！」
「我らの戦いは大陸で行われているだけだ。カストラート海に来るのはこれが初めてのこと、平和を乱したなどと言われる覚えはない。だが」
サラディンの声は静かだがよくとおった。いまでは広場に集まったほとんどの者が彼の話に耳を傾けているのがランスロットにははっきりとわかる。
「そなたたちがゼテギネア大陸から来たというのなら話は別だ」
「な、何を根拠にそんなことを言い出すんだ？」
サラディンはランスロットの前に進み出たが、後ずさりをした者も何人かいた。
「そなたたちがカストラート海の者らしくないことを言うからだ。それは同時に、わたしの疑いを裏づけてもいる」
「じじいが知ったような口をきくんじゃねぇぞ」
サラディンは笑い声を漏らしたが、それは長い時間ではなかった。
「そこまで言うのならば、ここにいる者たちに訊いてみようか。
誰か、彼らの素性を知っている者はいないか？　彼らはどこから来たのだ？」
「マーケサズの奴じゃねぇ」
即答したのはカノープスが会話をした男だ。その言葉に何人もが頷く。
「ファニングにもこんな奴らはいねぇ」
人垣から答えが返ったのを皮切りに、彼を知らないと言う声が次々に上がった。
サラディンがさらに進むと人垣が分かたれ、ランスロットは彼に追従する。
「我ら解放軍がカストラート海に現れては都合が悪いのはただゼテギネア帝国のみのはず。だが帝国はすでに人魚たちに荷担しているとも聞いた。その上、マーケサズの人びとを煽ろうとは、そなたたちは何を企んでいるのだ？」
「畜生！」
一人が逃げ出すともう一人が即座に追った。広場の端からもさらに数人逃げていく。
「待て！　誰か、そいつらを捕まえてくれ！」
ランスロットはすかさず追いかけたが、予想に反して助けの手は伸ばされず、厳つい顔をした漁師たちは一斉に手を引っ込めてしまった。
「ランスロット！」

サラディンに呼び止められなければそのまま追いかけていったところだが、彼はすぐに戻った。
「彼らのことは捨て置くがいい。マーケサズではもう見ることはあるまいし、あれだけ顔が知られてはこれ以上悪さもできまい」
「承知しました。しかし、わたしたちはこれからいかがいたします？」
サラディンはすぐには答えず、人魚が縛りつけられていた中央に進んだ。人の顔は見分けにくくなっていたが、集まった人びとはまだ帰ろうとしない。
人づてに松明が廻されてきて、最後はランスロットからサラディンに渡った。
「そなたたちにはもう遅い時間かもしれないが、確認させてもらいたいことがある。もうしばらく、我らにつき合ってはもらえぬか？」
ランスロットは剣に手をかけこそしなかったが、いつでもサラディンを庇えるよう、立ち位置には気を遣った。
「いったい何の話だ？」
「そなたが皆の代表か？　名前から聞かせてくれ」
「別に、代表なんて大したものでもねぇけど、俺はウァロっていうんだ」
「謙遜することはねぇさ！　おめぇはマーケサズ島一の漁師だ」
「そうだ、マーケサズ島一ってことはカストラート海一ってことさ！」
「そうだな」
「ウァロが代表なら、誰にも文句はねぇさ」
「それならばウァロ、そなたが代表で答えてくれ。一人で決められぬことであれば、皆と相談してもらってもかまわない」
「お、おぅ。何でも訊いてくれよ」
「まずそなたたちが本当に人魚たちと戦うつもりなのか、そのことを聞かせてもらいたい」
サラディンの発した最初の質問は、どう考えてもウァロ一人で答えられるものではなかった。
「ちょっと待ってくれ。そいつはみんなと相談してみねぇとわからねぇ」
「かまわぬ。だが、もしもそなたたちが今度の件で人魚たちと一戦交えるのも吝(やぶさ)かでないと言うのならば、わたしはそれを止めねばならぬ」
「ええと、あんたら、解放軍っていったっけ。俺たちが人魚と戦うのに、どうしてあんたらに止められなきゃならねぇんだ？」

「人魚たちの後ろにゼテギネア帝国がいることは知っていよう？　たとえ帝国がいなくとも、人魚たちの戦闘部隊はそもそもそなたたちが容易に勝てるような相手ではない。無益な戦いはやめるよう諫めねばなるまい」

「だからって、あいつらに殺された奴がそのままでいいってことはねぇだろう？」

答えたのはウァロ以外の男だったが、皆が頷いて彼を振り返る。

「話が前後するがその時のことも訊きたいと思っていた。漁船が人魚に襲われた時、そなたたちはどうやって人魚たちを倒し、一人を捕らえたのだ？　誰でも良い。その場に居合わせた者は話してくれぬか」

「それが、そいつらはさっき、逃げちまったよ」

「なぜ彼らを船に乗せることになったのだ？」

「危ねぇって言われたものだからよ。ゼテギネア帝国っていうのが人魚たちと手を組んだってそいつらが教えてくれたんだ。それでおっかなくなってなぁ」

「恐ろしくなったと言うことは、人魚狩りへの報復でも心配したのか？」

「そ、それは」

カストラート海の漁師には誰にでも心当たりがあるようで、ウァロも含めてその場の者たちが話し合う。

その雰囲気は、もしもカノープスがここに残っていたなら、身勝手なと怒り出してしまったかもしれない。

サラディンも黙ってきいてなどおらず、変わらぬ調子で話しかける。

「わたしはそなたたちが人魚たちを狩ってきたことを責めるものではない。だが、そなたたちが彼女らを殺したことに多少でも罪悪感を感じると言うのなら、漁船が襲われ、仲間たちが殺されたことを受け入れよ。そなたたちがやり返せば人魚たちも黙ってはいるまい。だが先ほど、そなたたちはわたしたちを捕らえようとはしなかったな？　帝国の間諜も逃がした。ニクシーやマーメイドの攻撃力はこの比ではないぞ。見ず知らずの者に危ないと言われ、人魚たちの報復を恐れるようなそなたたちでは勝つことはかなうまい」

「あんたら、解放軍っていったろう。人間のことは人間同士、助けちゃくれねぇのかい？」

「そなたたちのしてきたことを責めるつもりはないと言ったが庇うつもりも人魚の肉を食べて不老不死になれるという根も葉もない流言に踊らされたことに同調するつもりもない。だが、もしもそなたたちが人魚たちに謝罪するつもりならば、その力になりたいと

思っている」
「俺たちに人魚に謝れって言うのか？」
「そうではない。謝罪するつもりならば、だ。すでに人魚たちに味方しているゼテギネア帝国がそなたたちにも荷担する理由がわからぬ。だが、帝国の目的がこのカストラート海に争いを引き起こすことであれば、わたしはそれを止めたい」
「だけど、帝国の連中はあんたらがさっき追っ払ってくれたんじゃないのか？」
「彼らがこれぐらいで諦めるようならばそうとも言えるが、帝国の目的がわからぬうちは油断できまい」
「だからって人魚たちと仲良くなんざできるかよ」
「ごめんなさいなんて言ったって、あいつらが許してくれるもんか」
「なぁ、人魚の肉が不老不死に効かないっていうのは本当なのか？」
ウァロの問いにサラディンは頷いた。
彼の未練がましそうな顔つきを見たランスロットは、収入の不安定な漁師にとって、確実に大金を得られるのであろう人魚の肉の売買が容易に諦められるようなものではないことを知った。
「我々解放軍がゼテギネア帝国を倒した後には、新王の名において人魚肉の売買は違法となろう。そなたたちとて売れぬ物に手を出す気はあるまい？」
「王だろうと何だろうとカストラート海のことに口出しなんかさせねぇぞ」
「そうだ。カストラート海のことはカストラート海で決めるんだ」
「だが大陸の者はそなたたちのようなわけにはいかぬ。それに、何度も言っているが人魚の肉を食べても不老不死にはなれぬよ」
「だけど、神帝グランが長生きだったのは人魚の肉を食べたからだろう？」
「そなたたちにとっては残念なことかもしれないが、そうではない。グラン王は人魚の肉など食してはおらぬし、不死ではない証拠に二四年前にラシュディに殺された」
さすがにカストラート海の人びともそのことは知っているようで一斉に沈黙する。神帝の死はそれほどの衝撃をゼテギネア中の人びとに与えた。ある者は王の盟友、賢者ラシュディの裏切りに驚き、またある者は神帝さえ逃れられぬ死を恐れおののきもしただろう。あるいはそれがゼテギネア帝国の圧政の始まりであることを予感した者もあったのかもしれない。

そんなことを考えていたら、何人かが大あくびをするのが目に入った。サラディンが言葉を切ると、ウァロまであくびをして、大してきまりの悪そうな顔もしないでいる。

「悪いんだけど、そろそろお開きにしてくれねぇか？　俺たちゃあ、日が出たら起きて日が沈んだら休むことにしてるんだ。みんな、眠くてかなわねぇよ」

果たして人魚たちと戦争になってもこんなにのんびりしていられるのかランスロットは疑ったが、意外なことにサラディンはあっさり同意した。

「それでは明日、日の出の後で、またここに来てもらいたい」

やる気のなさそうな返事がいくつか返る。

「じゃあ、あんたらは俺んところへ泊まってってくれないか。大陸からの客なんてずっとねぇから、かかぁに御馳走用意させて待ってるんだ」

「泊まることはできぬが、食事はいただきに行こう。だがウァロ、大陸から客が来ぬのは帝国のためだ。我ら解放軍がゼテギネア帝国を倒せば、またカストラート海にも客は訪れるようになるだろう」

「へぇ。そいつは、ぜひともあんたらに頑張ってもらわなきゃならねぇな」

思わぬ論理の飛躍にランスロットは驚いてサラディンを見たが、彼はウァロと話し続けている。それがサラディンの本心とも思えないが、口先だけの人物でないこともわかっていたのでランスロットは思わず首を傾げてしまう。

結局、二人はウァロの女房お手製の漁師料理を御馳走になり、サラディンが予告したとおり、ウァロの家には泊まらず〈漆黒の涙〉号に寝に帰った。ウァロの女房にも引き止められたのだが、お世辞にも大きい家ではなく、二人を寝台に寝かすために家の者を床に寝かせるのはランスロットにも同意しかねることだったからだ。

見張りをローベックと交代した時、ランスロットは改めてカノープスの不在を思い知らされた。けれど、その当人は一人きりで、敵とも味方ともわからぬ人魚と一緒にいる。

たとえそれが戦い慣れた仲間とではなくても味方とともにいることの心強さをランスロットはかみしめる。

多くの者は独りきりで戦い続けることはできない。反帝国を標榜する者が解放軍に集うのも、敵の巨大さもさることながら、無意識のうちにであれ、仲間を求めているからだ。

同志がいることの頼もしさ、そこに頼ろうとしてしまう人の弱さ、それらのすべてから超越したように見える解放軍のリーダー、その強さを見習いたいと思い、いまは彼女の強さと弱さがどこから来るのか知りたいと思っている。

「だが、こんなことを君に言っても鼻先で笑われてしまいそうだな」

そのグランディーナもいまは西の彼方、ゼテギネア大陸を東西に分かつアラムート海峡の辺りだろう。

「サラディン殿、先に休ませていただきます」

彼は頷き、すぐ書き物に注意を向ける。見張りをしてもしなくても、サラディンが夜更かしすることに代わりはないらしい。

しかしランスロットはそれ以上追求することは諦めていた。ほとんど船に乗っているだけだったのにそれなりに疲れるものだ。体調を整えるのを怠ると、いざという時に役に立たないことを彼はよく知っていた。

「それで、これからどこへ行くんだ、メリアー？」

「エニウェトック島に。そこに私たちの仲間が大勢住んでいるのよ」

「エニウェトック島？　聞いたことのない島だが、無人島の一つかい？」

「人間が住んでいないという意味では無人島だけれど、私たちがいるのだから無人島という言い方は正しくないんじゃないかしら？」

「それもそうだな。俺も人間の中にいることが長いもので独断的な言い方をしちまった。これから気をつけるよ」

「ぜひ、そうしてちょうだい。人間が基準だなんて、みんな、いい顔はしないと思うわ」

「悪かったよ、メリアー」

カノープスはかなり冷や汗をかかされたが、彼女はようやく微笑んだ。

「エニウェトック島はサライゴメス島の北東にある島よ。昨日も言ったとおり、ここから二日ぐらいで行けるわ」

「なるほど。それじゃあ、早速、行くとしよう」

先に泳ぎだしたメリアーの後を追いかけてカノープスも発つ。

カストラート海の地理については、ピトケアン島からマーケサズに向かう途中でサラディンが簡単に教えてくれていた。グランディーナもそうだが、彼も土地勘を得るのは早い方のようだ。

大陸航路の終着点が南西のファニングという町だが、そこから北東に島を二つ挟んでマーケサズ島がある。カストラート諸島に四〇ある島々の中で最大のマーケサズ島には、マーケサズのほかにパルミラ、トンガレバ、ファカラバと四つの町があり、文字どおりカストラート諸島の中心である。その西にマルデン島、パペーテ島が接するように浮かび、ファニング島と合わせてこれら四つの島々でカストラート諸島の八割近くの人口を占めるそうだ。マーケサズ島の北東にサライゴメス島、東の離島ビパオア、南のムルロア島と北西のピトケアン島は、どの島もマーケサズから船で少なくとも一日かかる距離がある。

海岸線に沿って北へ北へ進みながら、二人はその日の夕方にはマーケサズ島の最北端、ファカラバ岬にたどり着いていた。

サラディンの話によると、美しい珊瑚礁で知られるファカラバには、かのオウガバトルの時、オウガに追いつめられた人間たちの前に天空の三騎士と十二人の賢者が降臨した伝説が残っているのだという。その力はカストラート海の片隅に人間たちを追いつめたオウガを瞬く間に討ち滅ぼしたほどで、魔界に通ずる扉、カオスゲートをも封印した。

人間は地上の覇者となり、役目を終えた天空の三騎士と十二人の賢者はいずこともなく消え去った。カオスゲートを開くことのできるただ一つの神器、聖剣ブリュンヒルドを地上に残して。

しかし、初めて訪れたファカラバは、ゼテギネアの生まれだったら誰でも聞かされて育つオウガバトル伝説の華々しさは微塵も感じられない、こぢんまりした町のようだった。こんな町で暮らしていれば、大陸での解放軍と帝国との戦いも遠い噂話にしか聞くこともあるまい。

「どうしたの、カノープス？　生魚ばかりで飽きてしまった？」

「いいや。この俺が、ずいぶん遠くまで来たと思っただけさ」

「カストラート海に来るのは初めて？」

「ああ。俺はシャローム地方の生まれなんだ。ここからずっと南にあるところさ」

「そこはどんなところなの？　海は見えて？　人魚は住んでいるのかしら？」

「人魚はいない。シャローム地方には俺のような有翼人が多いんだ。それに人間かな。あんたは俺が初めて会った人魚さ」

生魚を食べるのも生まれて初めてだったが、新鮮なせいかそれほど臭みはなく、彼は酒の肴に向いているかもしれないと思っていた。

「あら、あなたも私が初めて会った有翼人よ。カストラート海に有翼人は住んでいないらしいわ。私も二〇〇年以上生きているけれど、有翼人は見たことがないもの。でも話に聞いたことはあったから一目でわかったわ」

理屈ではわかっていても、メリアー自身の口からさらりと二〇〇年と言われるとやはり抵抗を覚える。

二〇〇年前、ゼテギネア大陸は群雄割拠の時代でいくつもの小国が興っては滅び、互いに相争い、一晩で地図が塗り替えられることはしょっちゅうだった。五英雄の登場はそれから一〇〇年も待たなければならない。有翼人は長寿だが、二〇〇年前を語ることのできる古老にはさすがにお目にかかったことがない。

「シャローム地方は海沿いなんだ。川があって山があって、穀物がよく育つ豊かな土地だけれど、これといって珍しい物もないふつうのところさ」

「そうでもないわ。私は川も山も知らないし、あなたの言う穀物という物も見たことがないもの、あなたの話はとても珍しいわ」

「そいつはお互い様さ。行けども行けども海ばかり、俺にはカストラート海のようなところの方がよほど珍しいと思えるね」

メリアーは笑い転げ、カノープスにかしまし三人娘を思い出させる。解放軍本隊から離れてかれこれ一ヶ月が経とうとしているが、彼女たちに再会できるのはまだ先のことだろう。

「明日は陽の高くならないうちにエニウェトック島に着けると思うわ。みんな、あなたを歓迎するわよ」

「それは、俺があんたを助けたからかい？」

「それもあるけれど、だって、あなたは男性だもの」

「へ？」

「おやすみなさい、カノープス！」

引き止める間もなくメリアーは海に潜り、またしても彼に波しぶきを浴びせた。

「俺が男だからって、どういう意味なんだ？　人魚にだって男ぐらいいるだろうに、そんなに数がいねぇってことか？」

その時、彼の脳裏に浮かんだのはバルモアで別れたとんがり帽子の魔女の姿だ。

「くそっ、何だってこんな時にあいつの顔が浮かんでくるんだ」

カノープスは岩場から座り心地のいい砂浜に移動した。翼の位置には気を遣って、昨晩もそうして休んだ。解放軍に参加して以来、ずっと誰かと一緒にいたもので一人で休むのは久しぶりだ。

移動しているあいだも海と空とに分かれているのでメリアーと話す機会もほとんどなく、カノープスはつい、解放軍の皆のことを考えてしまう。

サラディンとランスロットは無事に切り抜けたか、グランディーナたちは本隊に合流したのか、荒鷲の城塞アラムートは陥落したのか、何より皆は元気でいるだろうかと気になって仕方がない。

空に瞬く星は昨日と変わることなく美しい。波の音も聞き慣れれば優しい子守歌だ。メリアーは美人で気だてはいいし、そんな彼女から好意を寄せられるのも悪くはない。

「ちぇっ。この俺としたことが里心がつくなんてどうかしてらぁ」

ふと触れた石を海に向かって投げる。彼はこの遊びが誰よりも得意だった。カノープスの投げた石は川面をいちばん遠くまで跳んでいった。

けれど、故郷の川も解放軍も、いまの彼には遠く、手の届かぬものであった。

風竜の月二〇日、ランスロットは夜明け前に目を覚ました。ウァロが「日が出たら起きて、日が沈んだら休む」と言ったことを覚えていたからだ。

もちろんサラディンやローベックたちも起きていて、彼らは〈漆黒の涙〉号で朝食を取った。しかしマーケサズの中央広場に再び赴いたのはサラディンとランスロットだけであった。

ところが、昨日はあれだけ広場を埋めていた人びとが、今日は三分の一もいないではないか。

「これはどういうことだ、ウァロ？」

「みんな、それほど本気で人魚たちと戦いたいなんて思ってねぇってことさ、たぶんな」

「それではここに来た者たちは、そなたも含めてそうではないと考えてもよいということだな？」

「まぁ、そういうこった」

「だが、そなたたちの意見に賛同する者は残念ながら少ないようだな？」

「ちぇっ。悔しいけどあんたの言うとおりだ。どいつもこいつも臆病でいけねぇや。一人殺されたくらいでびびっちまいやがってよぉ」

「そなたは、殺されたのが自分の身内でも同じこと

が言えるのか？」
「それは、そういうわけじゃねぇけどよぉ」
「人魚たちと戦争になればもっと大勢の者が殺されよう。人魚たちの戦力はそなたたちが考えているよりずっと強力だ。もちろん人魚たちも大勢殺されるかもしれないが戦争になればどちらも無傷ではすまぬぞ」
「そんなこと、わかってるけどよぉ」
「どちらが勝っても損害は小さくない。戦争とは得てしてそのようなものだ」
「でも、あんたたちが味方してくれれば、人魚になんか楽に勝てるかもしれないじゃないか」
「だがわたしは、その戦は止めるつもりだと言ったはずだがな」
「何だってそんなことを言うんだ？」
「わたしは戦は好まぬ。そなたたちも人魚も、できるだけ死なないですむような道を探したいのだ」
「でも、俺たちやあんたたちがいくらそう思っていたって、人魚たちが同じように思うとは限らねぇだろう？」
「そのためにもそなたたちの意志を確認してから、人魚たちに会いたいと思っている。彼女らにはゼテギネア帝国がついているが、両者の意志は統一されていないようだ。まだ止めることはできるかもしれない」
「何でそんなに止めてぇんだい？　あんたたち、大陸の人間にはカストラート海のことなんて関係ないんじゃねぇのかい？」
「どこの者であろうと人が死ぬことは好まぬ。ましてやこの戦は完全にそなたたちや人魚たちの意志によるのではない。そのやり方にはわたしは覚えがあるし、嫌っているのだ」
そう言ったサラディンの表情が厳しく引き締まる。バルモアで倒したはずの兄弟子アルビレオを思ってのことだろう。
「何だかよくわからねぇけど狩りを止めりゃあいいんだな？」
「ウァロ?!　おまえまでそんなことを言い出すのか？」
「だって考えてもみろ。人魚たちにびくつかされてるおかげでここ何日かまともに漁にも行けやしねぇ。あの用心棒って奴らを雇ってりゃあ、確かに人魚を追っ払うのも殺すのも難しくなかったけんど、あいつらを雇うのにかかる金の方がでけぇ始末だ。こんなことをしていたら人魚たちと戦うより先に俺たちが干上がっちまうぞ」

「そんな大げさなことがあるかよぉ」
「そうだ、そうならねぇように人魚たちと戦うんじゃなかったのかよぉ？」
「そう言ってた奴らは逃げちまったじゃねぇか！」
ウァロが突然怒鳴ったのでランスロットも驚いた。その場にいた者の中でサラディンだけが予期していたような顔だ。
「だって、それはこいつらが無茶言ったからじゃねぇか」
「それは違う。あいつらがいたら、俺たちは人魚たちと戦わされてたんだ」
「おめぇだってそうしようって言ってたじゃねぇか。人魚に馬鹿にされてなるかって言い出したのはおめぇだぞ、ウァロ」
「だがそなたはそうしても空しいことに気づいたのだろう？」
「そ、そうだ！」
「そなたたちの仕事は人魚と戦ったり殺すことではなかったはず、そなたたち漁師の相手はこのカストラート海と魚であろう？　もしもそなたたちが戦うべき相手がいるのなら、それは海と魚であろう？」
「そうだ！」
サラディンの言によほど勇気を得たらしく、ウァロは力強く何度も同意する。
「ならば、そろそろ本業に戻るがよい。彼らゼテギネア帝国を倒すのがわたしたちの仕事だ。そなたたちは安心して漁を再開するがいい」
「本当にいいのか？」
「人にはそれぞれなすべきことがある。だが、カストラート海では二度と人魚は狩らぬと誓ってくれ」
「いいとも」
ウァロも含めて、あっさり同意したのがランスロットには不可解を通り越して不審でさえある。
けれど、サラディンは頷くと港の方に戻りだした。
「サラディン殿、あれだけの言質（げんち）を信用してしまってもよろしいのですか？」
「おそらくは。彼らは人魚たちを怒らせることの不利益さを学んだはずだ。それにいくら彼らが海に慣れているといっても海では人魚たちに決してかなわぬ。人魚たちと争っても彼らが得られるものなど何もありはしない」
「ですが、本当にそれで人魚たちを説得できるでしょうか？　彼らが学んだと言ってもしょせんはこの場での口約束に過ぎないではありませんか」

「人魚たちには、あるいはカノープスにさえそう言われるかもしれぬな。だがわたしが彼らを疑うわけにはいくまい。信じるも信じないも人の心次第、その境を決めるのはその者の心を決めること、疑い出せばきりがない」

「申し訳ありません。差し出がましいことを申しました」

「そなたの疑問はもっともだ。だがたとえ彼らが約束を守らなかったとしても、もはや我らの関知するところではないし責を負わされることでもあるまい。わたしはそうならぬよう願うばかりだがな」

二人が港に戻ると、アレイス船長らが待っていた。

セダンダがサラディンに近づいてきたのを見た時にランスロットは今朝の食事時どころか、昨晩から彼がいなかったことを思い出した。

「サラディン殿、彼らは街道を北に進み、どうやらパルミラの方に向かったようです」

「わかった。

ここからパルミラまでは船で一日ほどの距離であったな？」

「仰るとおりです。このまま船でパルミラに向かわれますか？」

「その準備をしていてくれ」

「かしこまりました」

「セダンダ、そなたはグリフォンに乗ったことはあるか？」

「はい、何回かありますが」

「そなた、一足先にパルミラに向かって、帝国軍の様子を調べておいてはくれまいか。おおまかな彼らの戦力を知っておきたいのだ」

「わかりました」

「だが、無茶はするな。もしもわたしの予想が当たっていれば、そこにいるのはわたしに負けず劣らぬ力を持った魔法使いのはずだ」

「承知いたしました」

ランスロットはそのあいだにシューメーを降ろしてくる。

エレボスだって表に出たくないはずはないのだが、グリフォンは彼がカノープスではないと見ると知らんぷりを決め込んだのだ。

「悪いな、エレボス。カノープスとは別行動だから、今回はおまえの出番はなかなかないかもしれない」

だが、撫でてやろうとするとグリフォンはうなり声さえ上げて彼を威嚇する。

どうやら、サラディンと乗った時に少しでも慣れてきたと思ったのは自分の勘違いだったようだ。もっともよくよく考えてみれば、エレボスは決してサラディンに慣れているわけでもない。むしろいまだから気づくのだが、エレボスは従わざるを得なくてサラディンに従っていたのではないか。

しかし、彼はそれ以上ぐずぐずしているわけにはいかない。急いでシューメーを連れて船を下りたが、サラディンは特に咎めることはなかった。

「気をつけて行ってくれ。くれぐれも無茶はしないように」

「心得ております。それでは、パルミラでお待ちしております」

セダンダを乗せるのは初めてだが、シューメーはおとなしく従った。その翼は力強く羽ばたき、たちまちのうちに北東の彼方に消えていった。

「船を出せ！　パルミラまで飛ばしてくれ」

サラディンの号令一下、〈漆黒の涙〉号はマーケサズ港を離れる。カストラート海は今日もよく晴れていた。

船がマルデンの沖を通りすぎていくころ、サラディンがランスロットたちを集めた。

「現在の状況とパルミラでの目的について話しておこう」

ローベックとクージュラージュはこうして並ぶと対照的な男たちだ。小柄なローベックは細身で、腰に二振りの剣を提げている。騎士や剣士というより、影のようにも見える。対するクージュラージュは大柄で多少のことでは動じなさそうな体格だ。大振りの槍を持ち、最初に挨拶をしたきり、ほとんど話さない。

「パルミラに帝国軍が駐在している。夜襲をかけて彼らを倒し指揮官の正体を確かめる。アルビレオ殿であればまた倒すまで、そうでなくても人間と人魚をわざと戦争状態に持っていくようなやり方は気に入らぬ。あの様子では人間たちはもう戦をする気はあるまい。ならば、帝国という後ろ盾を失えば、人魚たちにも考えを改める余地もあるだろう」

「しかし、帝国はすでにマーケサズでの失敗を知っておりましょう。あの様子では我らが解放軍ということも承知のはず、むざむざ罠に飛び込むようなものではありませんか？」

「帝国に対し、我らの利点は二つある。彼らは我らの規模は知らぬであろう。それがまず一点、さらに彼らはマーケサズの失敗を明らかに予期していなかった。

ゆえに立ち去るしかできなかったのだ。これが二点目だ。彼らの方が規模は大きかろう。だから体勢を立て直せぬうちにたたく」

「ですが、帝国も我らの襲撃ぐらい予想していましょう。策はどうするのですか？」

「それはセダンダの偵察を聞いてから決める。敵の状況もわからぬうちから策など立てても空しいだけだ。だがパルミラは、マーケサズよりも小さな町だ。そのことが我々にとって凶と出るか吉と出るかはわからぬがな」

「サラディン殿はパルミラを訪ねたことがあるのですか？」

「いいや。それも書物の上での知識に過ぎぬ。机上の空論と笑われるかな？」

「いえ、そのようなことは」

ランスロットは思わず赤面した。

船はとうにマーケサズ島とパペーテ島のあいだを抜けてマーケサズ島の北岸沖を東進している。

「カノープスはどこまで行ったでしょうか？」

「わからぬ。だがパルミラが帝国の本拠地であれば、人魚たちの住処がどこかという情報を得られるかもしれないし、見当違いの方に行ってしまったかもしれない。いまは彼を信ずるしかあるまい」

その言葉も淡々としたものであった。

〈漆黒の涙〉号がパルミラの沖合に着いたのは夕方になってからだ。

「船はこのまま港に入れてくれ。見張りはいないようだが、上陸するまで各人が気をつけるように」

「承知しました」

ランスロットは船の左側に立ったが、パルミラ港はサラディンの言うとおり見張りどころか人気もなく、港に繋がれた船が所在なさげに揺れている。

甲板にはいつの間にかエレボスまで引き出されていたが、グリフォンは人の動きには無関心だ。

やがて何事もなく〈漆黒の涙〉号が港に停泊した時、アレイス船長は心底安堵したような顔をして、大きなため息までついた。

四人と一頭が上陸すると、サラディンは船をパルミラの沖まで戻すように命じた。

「この人数では船まで守りきれぬ。船を襲ってくることはないかもしれないが、念のため、距離を取っておいてくれ」

「承知しました」

「まずはセダンダの話を聞くとしよう。ランスロットとわたしは一足先にグリフォンで町を出る。そなたたちも後から来てくれ」
「かしこまりました」
船がまた港を離れていくのを見る暇もなく、エレボスは飛び立った。マーケサズの町もそう大きなものではなかったが、城はなく、帝国軍がどこに駐留しているのかわかりにくい。
「なぜ、パルミラもマーケサズも港に人がいないのでしょう？　カストラート諸島のような海に生活の大半を依存する地で、おかしいとは思われませんか？」
「ウァロが言っていたであろう、人魚たちが漁船を襲うようになってから漁ができなくなったと。どこも事情は似たようなものではないのか」
帝国の狙いがわからなくてランスロットは考え込む。人間と人魚を戦わせて帝国にどんな利点があるのか思いつかない。かといって、いちいちサラディンに訊くのも芸のない話だし、さすがの彼も言及しないところを見るとわかっていないのかもしれない。
パルミラの町をあっという間に飛び越したエレボスは郊外に着陸した。あまり街道らしくない街道が東西に延びて、街道の南側には林が広がっていた。
その林の中からセダンダが現れる。サラディンはグランディーナがよくするように影と二人きりで話し、ランスロットはその光景を遠くから見守った。
そこへローベックとクージュラージュが急ぎ足でやってきた。
「サラディン殿！　帝国兵がこちらに来ます！」
「規模はどれほどか？」
「二〇人ほどです。わたしたちのことは気づいていないようですが、先ほど、グリフォンで町を飛び越えたところを見られたのかもしれません」
「来たか。ランスロット、そなたの剣を貸してくれ。わたしが彼らを迎え撃とう」
「いくら魔法とはいえ、一度に二〇人も相手にできるとは思えません。無茶です」
「だから、そなたの剣を借りたいと言ったのだ。だがそなたが一時的に丸腰になってしまうな。ローベック、そなたの剣を一振り、ランスロットに貸すことはできるか？」
「わたしはかまいませんが、ランスロット殿はこのような剣でも大丈夫でしょうか？」
ランスロットにはサラディンが何をしようとしているのかさっぱりわからないままだったが、それ以上、

問うている時間がないことだけはよくわかった。彼は鞘ごとスムマーヌスをサラディンに渡して、ローベックの差し出した鞘の真っ黒な剣を受け取った。

「そなたたちはいまは隠れているがいい。わたしが攻撃するまで出てはならぬぞ」

不審に思いつつ、ランスロットは言われたとおりに隠れる。〈何でも屋〉のジャックからサラディンに従うよう厳命されているのか、ローベックたちはランスロットよりも行動が早いくらいだ。

できるだけ近くの木陰に隠れて様子を窺っていると、サラディンが左手にスムマーヌスをかまえた。

夕闇の濃くなり始めたパルミラの町から帝国軍が現れる。騎士や狂戦士のほかに槍騎士やホークマン、それに魔法使いも見える。

サラディンが魔法を撃ったのはその時だ。帝国兵が彼を認め、魔法を撃つよりも速い。その雷はスムマーヌスに吸い込まれたかと思うより速く、剣から無数の雷となって帝国兵に降り注いだ。

同時に、嫌な音を立ててスムマーヌスは真っ二つに折れ、サラディンの左手も無事ではいられなかった。

ランスロットは彼を庇うべく飛び出し、あれほどの魔法を受けながら、なお斬りかかってきた帝国軍の騎士の剣を真っ向から受け止めた。

「セダンダ！　サラディン殿を頼む！」

ローベックたちも遅れなかった。彼らは林を背に扇状に並んで、ランスロットを中心に応戦し、誰に指示されるでなく、エレボスとシューメーも空中からこれに加わった。

サラディンの放った魔法は解放軍の魔術師が打つよりも威力があったし広範囲に及んだが、一度に二〇人もの帝国兵を倒すほどではなかった。それに帝国兵には僧侶か司祭の姿も見える。ランスロットたちの不利は端から明らかであった。

「エレボス、シューメー、戻れ！」

サラディンの命令にグリフォンたちがとって返す。

彼が今度唱えた呪文は、先ほどとは別のものだった。一〇バス（約三メートル）ほどの高さの紅蓮の壁が、帝国兵たちのあいだに立ち上ったのだ。クージュラージュが急いで槍を引っ込めたが、穂先に近い柄が焦げていたほどの威力であった。

その時に耳をつんざいた悲鳴が、しばらくランスロットの耳から離れなかった。

振り返るとサラディンは力なく、差し伸べた右手を落とした。

助けを断られたらしく、セダンダが申し訳なさそうな、立場のないような顔でこちらを見ている。
「少し、やりすぎたな。わたしのことはいい。彼らに戦意がないのなら助けてやるがいい」
そう言われて、彼はようやく戦場を振り返った。
真っ黒に焦げた草と、そこここに倒れた負傷者という光景は、戦場と言うよりも火事場のようでもあった。
ランスロットと切り結んでいた騎士は炎の壁に巻き込まれないで済んでいたが、味方の被害の大きさに腰を抜かしそうになっているようだ。
「立てるか？　この状況で君たちもまだ戦い続けたいとは思うまい。休戦しないか？」
「反乱軍にこんなに強い魔術師がいるなんて聞いていないぞ」
「それは、君たちの情報が古いせいだろう。来たまえ、紹介しよう」
誰かに命令されるまでもなく、彼以外の帝国兵たちは怪我人の救出にあたり、ローベックたちもすでに手伝いに加わっている。
ランスロットは騎士を連れてサラディンの元に戻った。セダンダが傷の手当てをしているところであった。
「こちらはバルモアで解放軍に加わっていただいたサラディン＝カーム殿だ」
「何だって?!」
サラディンが自嘲気味な笑みを浮かべる。
「わたしの名を知っているのならば話が早い。即刻、ゼテギネアに帰ってラシュディ殿に伝えるがいい。不肖の弟子サラディンが兄弟子にかけられた石化の魔法を解かれ、師を討つべく解放軍に加わりましたとな」
「そ、そんなことできるわけがない」
騎士は力なくうなだれる。その態度にランスロットはもとよりサラディンも興味を覚えた様子だ。
「なぜ、できぬのだ？」
「わたしはいまはゼテギネア帝国に仕えていますがもともとはバルモアの生まれで、セレスト＝ナクソスといいます。ドヌーブの英雄と名高いあなたを裏切ることなどできません」
その答えをランスロットはある程度、予想していたが、サラディンは驚いたように目を見張った。しかし、彼はすぐに同郷の騎士の傍らに片膝をついた。
「裏切りなどと恥じることはない。それにわたしはドヌーブの英雄などでもない。そなたは思うところがあってゼテギネア帝国に仕えているのだろう。ドヌーブという国はすでにないのだ」

「で、ですが、サラディン殿」
「失われた国のことを語り合ったところで互いに益はなかろう。それよりもそなたたちの将について知りたい。話せぬのならば、そなたと話すことはない」
セレスト＝ナクソスと名乗った騎士はまたしてもうなだれてしまった。
年のころはランスロットよりも若く、アレックらと同年代だ。だが、サラディンはゼテギネア帝国の建国後も十四年間も抵抗し続けたので彼の功績を知っていてもおかしくはない。それは「神帝グラン」という名しか知らないゼノビアの若者とは雲泥の差がある。
そうしているあいだにサラディンの傷の手当ては終わっていた。
「すまなかったな、ランスロット。せっかくジャックから譲ってもらった剣を、ろくに使わぬうちに壊してしまった。そうなるだろうと予想してはいたが、先ほどは説明する時間もなかったのでな」
「剣のことはかまいませんが、お怪我の方は大丈夫ですか？」
「片手ぐらいならば大事はない。そなたの剣は折れたが、わたしの手は火傷で済んだ」
それは良かったとも言いがたくランスロットが逡巡していると、セレストが割り込むように近づいた。
「サラディン殿、わたしの知っていることをお話しします。我々の将だったのはあなたにとっても縁浅からぬ方です」
サラディンの表から血の気が引くのをランスロットは認めた。否、彼がそのまま気絶するかと思って手まで出したほどだ。
だが彼はそうしなかった。杖を握り締めた手が傍目にもはっきりと震え、小刻みに動いた杖の先端が土を抉るのを、止めようとした手も震えていた。
「パルミラにいた我らの将は、賢者ラシュディさまの四番弟子、アルコル殿です」
「何だと?!」
それは別の意味で驚きであった。ガレス皇子のようにラシュディに師事した者は少なくないが、公式に知られている弟子はあくまでも三人、アルビレオ、サラディン、カペラだけとされているからだ。
「ですが、いまはアルコル殿はいません」
「それぐらい知っている。我々の目的はパルミラを落とすことだ。だがアルコルはどこへ行った？　我が弟弟子だというのならばなおのこと、暗黒道にむざむざ堕ちようとするのは止めなければなるまい」

「アルコル殿は今朝方、部下を二人連れてファカラバへ向かいました。それから、このことはわたししか知りませんが、明日は人魚たちの長に会いにサライゴメス島の東隣の島に行くということです。我々がカストラート海に来たのは賢者ラシュディの指示と伺っていますが、目的はアルコル殿しか知りません。アルコル殿が人魚の長に会うのは二回目と聞きました」

彼らが話しているあいだにも傷ついた帝国兵の治療は進められており、セレストが話を中断して時々指示を下す。

「我々にはありがたいことだが、将の行く先をそのように話して、そなたの立場は大丈夫なのか？」

「ゼテギネア帝国は敗者に容赦がありません。二ヶ月前、ゼノビアを失ったデボネア将軍も、四天王の地位を追われ、どこかの監獄に閉じ込められたと聞きます。ましてやわたしのような一介の騎士がパルミラを失ってその罪を咎められないで済むとは思えません。わたしはできたら、バルモアに戻るつもりです」

「バルモアはおそらく、そなたが離れた時とそう変わっておるまい。復興はほとんど進んでいない」

その言葉にセレストは少しだけ嬉しそうな顔をする。

「そうですか。それならば、わたしにもできることはありますね。故郷を離れてみてよくわかりました。わたしはやっぱりバルモアがいちばん好きなんです」

明るく言い切る彼を、ランスロットは羨ましいと思った。自分はそれほどゼノビアという土地を愛していない。彼が忠誠を捧げるべき相手はゼノビアという国であり、そこを治める王だ。いまでこそ解放軍の一員としてゼテギネア中を旅することも厭わないが、それは自分が剣を捧げた者がそうするからこそ従うのだ、ということをいまさらのようにはっきりと自覚したためだった。

「ならば、そなたはバルモアに戻るがいい。いろいろと助かった」

「あなた方もどうかご無事で。反乱軍、いえ、解放軍のご武運をお祈りします」

それから彼らがパルミラを出て船に戻ったころには夜はすっかり更けていた。

セダンダたちは夕食を取るとすぐに休んだが、ランスロットは気にかかることがあって、まだ起きていた。

「まだ起きていたのか。明日は真っ直ぐにサライゴメス島の先の島に向かうぞ」

「それは承知しているのですが、考え事をしていた

ら眠れなくなってしまいました」
「アルコルのことか」
「それだけでもありませんが」
船首に座っていたらサラディンが隣に腰を下ろす。
「サラディン殿、なぜエレボスを飛ばしたのです？帝国軍に見つけられることを期待したのですか？」
「否定はしない。攻めるよりも迎え撃つ方が対処しやすいと判断した。気に入らなかったか？」
「いえ、正攻法で攻めても我々の数では勝てないでしょう。わたしという人間が甘いのです」
「では肝に銘じよ。わたしがグランディーナから聞いた優先事項は一に勝つことであり、二にそなたたちがいかに傷つかぬかだ。策は問わぬ」
「承知しております」
「先ほどは二人亡くなったそうだ。あと幾人殺せば、ゼテギネア帝国は倒れるのであろうな」
「わたしにはわかりかねます。ですがサラディン殿までグランディーナのように矢面に立たれることはないのではありませんか？」
「先ほどはわたしの方が効果的な攻撃ができると思ったからそうしたのだ。あれで戦意を挫ければと思ったが、そううまくはいかぬものだな」
「帝国にも容易に下がれぬわけがあるのでしょう」
「帝国兵が個人的にわたしを憎むのならその方がよい。だがかなわぬとわかっている敵に降ることを許されぬ兵は憐れとしか言いようがない」
「しかしこの先は、いつか旧ハイランド領に入ります。我々が侵略者になれば、彼らの抵抗もより激しいものになるでしょうし、降伏はいたしますまい」
「だから降伏したくなるよう仕向けるのだ。圧倒的な力の差を見せつけて、抵抗が無駄だと思わせねばならない。幸い、わたしには解放軍の誰よりも知名度があるし、ドヌーブ王国ありしころの抵抗を知る者も帝国には残っていよう。そのためには汚名を被るのもやむを得まい」
ランスロットは息を呑んだ。サラディンがそれほどの覚悟を持って戦っていようとは思いもしなかったからだ。あるいは彼もまた養い子同様に帝国打倒なりし暁にはゼテギネアを去るつもりでいるのかもしれない。
しかし、彼が何か言う前にサラディンは立った。
「もう休むがいい。明日はファカラバに寄らず、真っ直ぐに無人島へ行く。そこが本当に人魚たちの住処だというのなら、ブリュンヒルドを手に入れるのもそう先の話ではないかもしれないからな」

「アルコルの目的を探らなくてもよいのですか？」
「それは本人に直接確かめればいいだろう」
そこにカノープスがいることをランスロットは切に願った。でも本人にそう言ったら笑い飛ばされそうな気もするのだった。

風竜の月二一日、カノープスとメリアーはファカラバから東にある無人島、人魚たちの言うエニウェトック島に着いた。人魚たちの住処は北東の入り江近辺で、島の北端から回り込んで間もなく、三つ叉槍で武装したマーメイドやニクシーが二人を出迎えた。
「メリアー！　無事だったの？」
「いつまでも帰ってこないから心配したのよ」
「ごめんなさい」
「エゲリアやサルナはどうして一緒じゃないの？」
「それが――――」
メリアーの表情が暗くなり、周囲の人魚たちも事情は察したようだ。かん高い声が一斉に止んで、沈鬱な雰囲気になる。
カノープスも事実は知っているだけに不用意なことは言えない。しかしじきに彼は自分に注目が集まっていることに気がついた。

「この人がメリアーを助けてくれたの？」
「そうよ」
「翼が生えてるわ！　あなた、人間じゃないの？」
「俺はバルタン、有翼人さ」
「素敵！　ねぇ、どんな風にメリアーを助けたの？　話を聞かせてよ」
「あなた、また人魚を助けたの？　よほどのお人好しか変わり者だわ」
「そっちこそ、元気そうじゃないか、リエッシー？」
「みんな、この人があたしを助けてくれたのよ。おかげさまでね。そういえば、今日は一人なのね。お仲間はどうしたの？」
「ちょっとわけありでね」
「ふーん」
カノープスはリエッシーのことなどメリアーを助けた時から頭の片隅に追いやっていたが、彼女はそうでもなかったようだ。
さらに人魚たちがまだ集まってきて、カノープスもその場で滞空飛行しているのが苦痛になり始めたころ、やっとメリアーが皆のあいだに割り込んできた。
「ちょっと待ってよ、リエッシー！　助けてもらったのはあなたも同じかもしれないけれど、カノープス

はいまは私のお客様だわ。私たち、ポルキュスさまにお会いしたいの。私は報告しなくちゃいけないこともあるし、彼も紹介したいし。みんなも彼と話すのはその後にしてくれない？」
「しょうがないわね」
「あなた、カノープスっていうのね？　また後でね、カノープス！」
「ああ」
マーメイドの娘が無邪気に手を振り、彼も振り返す。それからメリアーを追いかけると、彼女は楽しそうに振り返った。
「みんな、あなたを歓迎しているわ。できれば、ずっといてほしいくらいよ」
「そりゃまた、大した歓迎のされようだな」
「でも、あなた、リエッシーとはどこで会ったの？」
「人間たちがパペーテって呼んでる島の北西辺りだ。俺たちの船を襲ってきたんで仲間が追っ払ったのさ。リエッシーと、ニクシーにオクトパスもいたな」
メリアーが急に止まったので、カノープスは彼女の顔をのぞき込む。いま言ったことは嘘ではないし、いままで彼女に話してきたこととも矛盾はしていないはずだがあまり自信はない。
「それはラアティラの部隊だわ。でも、どうしてあなたたちの船を襲ったりなんかしたのかしら？」
「俺たちの乗ってた船がカストラート海の連中と間違えられたかららしいぜ」
「なんてことなの」
メリアーがそれきり黙り込んだ理由がわからないので、彼も慎重にならざるを得ない。
しかし、よく考えてみると、そもそも人魚たちがなぜカストラート海の船を襲ったのか、具体的な理由は彼も知らない。自分たちが襲撃された時には当然のことのように撃退したが、彼女らはなぜ、そんな危険を冒したのだろう。
「いいわ、このことは私一人で考えてもしょうがないもの。それにラアティラからポルキュスさまに報告が行っているはずだわ」
メリアーはようやくカノープスの方に向き直った。
「ちょっとここで待っててくれる？　ポルキュスさまと話したいことがあるの。それからあなたのことも話してみるわ。きっと会ってくれると思うけれど」
「わかった。だけど、俺もここで待機してるのはいい加減に疲れた。あの岩で待ってるから、お許しが出たら呼んでくれ」

「いいわ」
入り江は断崖になっており、いくつもの洞窟が穿たれている。メリアーはそのうちの一つに入っていったが、人魚たちの長がいるからといって、とりわけ立派な洞窟というわけではなさそうだ。
先ほどのマーメイド以外にも何人もの人魚たちが泳いでいるのを彼は見つけたが、彼女らは話しかけてこなかった。あるいはカノープスの存在に気づいていないのかもしれないし、たまたま積極的な性格じゃない人魚なのかもしれない。
ただ、彼がいまさらのように気づいたのは、男の人魚が、もしもいるのならばだが、一人も見当たらないということであった。
「あなたは男性だもの」
そう答えたメリアーの真意がカノープスにはようやく思い当たった。
「カノープス！」
そこへリエッシーが追いかけてきた。メリアーが近くにいないのを確認して、少しだけ勝ち誇ったような顔をする。
「お姉様はポルキュスさまのところでしょう？　どうせしばらく出てこないわ。それまで、あたしとおしゃべりしていましょ、いいでしょ？」
「何の用だい？」
「一緒にいた人たちはどうしたのかと思って。あなたたちのこと、誰に言っても信じてくれなかったんだもの。ラアティラのお姉様だって嘘だろうって言い張るのよ、あたしがどれだけ悔しかったか、わかる？」
「わからないとは言わないが、そいつは俺のせいじゃないぜ」
「そうね。あなたが来てくれたから、あたしは嘘つきにならないですんだわ。何を笑っているの？」
「あんたが、俺の知り合いによく似てるからさ」
「本当に？」
「ああ」
「その人に会ってみたいわ」
もっとも、その似ているという知り合いが、リエッシーよりも年下だろうということをカノープスは言わないでいた。メリアーの例もある。あるいはリエッシーだって自分より年上かもしれないのだ。
「ねぇ、それで？　メリアーのお姉様とはどうやって知り合ったの？」
「彼女がマーケサズで捕まってたところを助けてやったのさ。あんたたちこそ、何で人間たちの漁船を

襲ったりなんかしたんだ？」
「ポルキュスさまの命令でだわ。でも、ポルキュスさまのところに嫌な人間が来たの。あたし、あんな奴、嫌いよ」
「嫌な人間って？」
リエッシーは唇をとがらせた。
「人間のことはよくわからないけど、すごく偉ぶってて嫌な奴、ポルキュスさまはカストラート海から人間を追い出すまでのあいだだって言うんだけど」
カノープスは鼓動が高くなるのをうるさいとさえ思っていた。彼女の言う「嫌な奴」がもしもアルビレオだったなら、彼の正体など一発で知られる。
バルモアではサラディンとランスロットの手を借りて倒したようなものだ。今度は二人ともいない。カノープス一人で何とかなるような相手には思えない。
「どうかしたの、カノープス？」
「いいや、何でもない」
「あら、何でもないなんて顔じゃなかったわよ」
「それよりもリエッシー、あんたたち、人魚に男はいないのかい？」
「そうよ。いまごろ気づいたの？」
「まぁな」
「あたし、とっくに知ってるものだと思ってたわ。お姉様があなたを連れてきたのも、種をもらうためだと思ってたのに」
「まじかよ」
「あら、あたしだってそのつもりだったわ。この前は子どもだったけど、もう立派な大人だもの、あたしも卵を持てるのよ」
「俺との？」
「勘違いしないで。卵はあたしたちのものだわ。あなたにもらいたいのは種だけなの」
「ぶっ！」
「心配しないでいいわ。卵からは人魚しか生まれないんだから、あなたには渡さない。娘はちゃんとみんなで育てるし、種が誰のものだろうとあたしたちは気にしないから。だいたい、あなたたちに人魚が育てられるとも思えないもの。どうしたの？　さっきよりも顔色が悪いわよ」
聖剣ブリュンヒルドの行方などいますぐ放り出して、カノープスはゼテギネアに飛んで帰りたくなった。
どうやら彼はとんだ後宮（はれむ）にやってきたらしい。いや、ここで期待されているのは種馬の役の方だ。彼はもう少しで頭をかきむしるところだった。

「あのなぁ、俺は人魚の生態なんて知ったのは、今日が初めてだったんだよ。事情もわからないのにそっちで勝手に話を進められて、これが驚かないでいられるか」
「あら、そう？」
「話になりゃしねぇ」
リエッシーは陽気に笑い出したが、いまのカノープスには悪魔的、とでも言いたいような声だ。
だから彼は、メリアーが近づいてきたことも声をかけられるまで気づかなかったほどだ。
「カノープス！　待たせてしまってごめんなさい。やっとポルキュスさまのお許しが出たわ。
リエッシー、あなた、こんなところで何をしているの？　カノープスは用事があるって、さっき、あなたに言ったと思ったけれど？」
「だって、お姉様はポルキュスさまと話していて彼が一人になってしまっていたじゃない？　せめて、お姉様が戻ってくるまであたしが話し相手になってあげようと思って。お客様を放っておくのは良くないことでしょう？」
メリアーは咳払いをひとつした。
「ともかく、もうそれはいいわ。ポルキュスさまがカノープスに会いたがっているんだもの。
行きましょう、カノープス」
「また後でね」
メリアーが振り返ったのは洞窟の手前まで行ってからだ。カノープスも振り返ると、リエッシーはもういなくなっていた。
「あの子に何を言われたのか知らないけれど、あまり気にしないでほしいわ」
「そんなわけにはいかないさ。ほかならぬ俺自身のことだってのにどうして黙っていられるかよ」
メリアーは驚いたようだが、彼女の答えを聞いたカノープスほどでもなかったろう。
「もしかしてあなた、知らなかったの？」
「あのなぁ。いくら俺が人魚のことを知っていたって、本物の人魚に会うのは初めてだし、人魚に女しかいなくて、人魚が卵生で、人間とでも有翼人とでも子供が作れて、生まれてくるのは人魚だけ、なんてことも今日、初めて知ったんだよ」
「ごめんなさい。私、てっきり知っているものだとばかり思っていたわ」
「まぁ、ちゃんと確認しなかった俺も悪かったけど、せめて一言、言ってほしかったな」

「私、何度も言ったじゃない、あなたが男の人だからって。それではわからなかったの？」
「あいにくと、俺たち有翼人も人間もあんたたちとは違っているんだ。さっき、リエッシーと話している時に気づいたよ。あんたたちには男がいないんだな」
「ええ、そうよ。それにあなたはここまで来た五〇年ぶりの男性だわ。私たち、十年おきに卵を産むの、でも、種がもらえないと卵は孵らないわ」
潤んだ瞳で見上げられて、カノープスはたじろぐ。そんなことを言われると協力しない彼が悪いみたいではないか。
しかし、彼もそれ以上何かを言って、メリアーの気持ちをこじらせるのは気が進まなかった。それに彼がポルキュスの待つ洞窟に入っていったのは、またしてもデネブの台詞を思い出したからだ。
「あなたの負け。もっと男を磨いて、彼女の一人でもつくりなさいな」
デネブの弁はともかくとしても、ここで逃げ出したら、それこそ男がすたるというものだった。
洞窟の内部は入り口からは考えられないほど広く、上から陽光が差し込んでいた。その奥にはニクシーが岩に腰かけており、カノープスを認めると笑顔を向けた。金色の尾は黄金のように輝いている。ニクシーはもう一人いたが、水の中にいるのでそれほど目立たない。だが、岩に腰かけたニクシーがポルキュスであるのは間違いなかった。
彼は岸に降りた。洞窟は十分に広いが、飛んでいくよりも歩いていくことにカノープスは慣れていた。
メリアーがそんな彼を不思議そうに見る。翼があるからといっていつでも飛んでいればいいというものではないことは、水中にいる彼女にはわかりづらいところかもしれない。
「ようこそ、カノープス。あなたを歓迎するわ。それにリエッシーやメリアーを助けてくれたこと、礼を言います」
「ああいうやり方は俺は好きじゃねぇ。先に手を出したのがあんたたちの方だとしても、ほかのやり方があったはずだ」
「だからといって、私は人間たちを殺させたことを悔やんではいないわ。人間には何人もの人魚たちが殺されているし、あの船にはマーケサズの支配者が乗っていた。彼はさんざん私たちの仲間を狩って金儲けを企んだという話ではないの、殺されて当然だわ」

「マーケサズの支配者？」
「ええ」
カノープスはメリアーを見たが、彼女はポルキュスの言葉に同意するように頷いてみせた。もう一人のニクシー、たぶんラアティラも頷く。
しかし、彼女らの話はサラディンの説明といささか矛盾している。彼の知識が十年前のものだとしても、そう簡単に町の制度が変わるものだろうか。

「カストラート海の多くの町は町長を置かない。マラノのように人びとの話し合いで物事を決めることが多いが、住人の数もそれほど多くないのでうまくいっているらしい」
「何だってそんな面倒なことを？」
「必要がないからだろう。カストラート海で最も尊敬されているのは腕の立つ漁師だそうだ」
「それは平和なものですね。ゼテギネア帝国はなぜそんなところにまで争いを持ち込もうとするのでしょう？　やはりブリュンヒルドのためでしょうか？」
その問いにサラディンは首を振っただけであった。
「それで、そいつはうまく片づけたのかい？」
先に首を振ったのはメリアーだ。
「船に乗っていたのは戦い上手な戦士たちでした。一人は殺せましたが、彼らは無防備だということではありませんでしたか？　むしろ、私たちが来ることを知っていたかのようです」
ラアティラは話す前にカノープスを盗み見た。
彼女たちが〈漆黒の涙〉号を襲撃した時はサラディンが対峙しており、カノープスはラアティラの顔をほとんど見ていない。
「私たちが襲った船は、彼の言う解放軍の物で、カストラート海の物ではありませんでした。私たちは無事でしたが、とても正確な情報だとは思えません」
「彼が嘘を言ったと？」
「たとえカストラート海の者ではないとしても、人間を信用するのは危険だと申し上げているのです」
「でも、剣はあったわ」
そう言って、ポルキュスはカノープスの反応を伺うように見る。
「俺はそもそもブリュンヒルドを探してカストラート海に来たんだ。メリアーに聞いただろう？」
「ええ、聞いたわ。でも、仲間と別れてきたのだったら、剣は要らないでしょう？」

「そうだな」
「どちらにしても剣は私たちでなければ行けないような深海に隠したわ。在処も私と、もう一人の人魚しか知らない」
「俺には必要ない」
「いいでしょう。あなたはメリアーやリエッシーを助けてくれたのだから、信じるわ」
「俺たちは人魚の肉を食べて不老不死なんて信じちゃいなかったし寿命にも不自由してないもんでね」
「ならば、あなたが役目を果たしてくれることを願うわ。私たちには勇敢な男性の種が必要なの」
「あんたが俺を招いたのは、種馬って言ってもあんたたちにはわからないんだろうな、要するに種をよこせって念を押すつもりだったのかい？」
「それだけではないけれど、目的の一つでもあるわね。この島に男性を迎えるのは五〇年ぶりだもの、たくさんの卵が孵ってほしいわ」
「まぁ、俺もここまで来た以上、協力しねぇなんて野暮なことを言うつもりはないが、ほかに俺を呼んだ目的があるのなら、そっちも聞かせてもらいたいね」
「あなたは解放軍、帝国の言う反乱軍の戦士なのでしょう？」
「そうだ」
「その腕を見込んで、私たちと一緒に戦ってもらえないかしら？」
「人間とか？」
「ええ」
「帝国となれ合うのは真っ平ご免だぜ。あんたたちだって、帝国の奴らを信用してるってわけじゃないんだろう？　それからさっき、彼と言ったな？　誰のことなんだ？」
「神聖ゼテギネア帝国女帝エンドラの使い、アルコルという男よ。船とブリュンヒルドのことは彼から聞いたの。知り合い、というわけではなさそうね」
「もちろん、初めて聞く名前さ」
「でも、あなたも聞いていたとおり、彼のくれた情報には全面的な信頼が置けないわ。少なくとも、彼は私たちに好意を持っているわけではない。最初にエニウェトック島に彼がやってきた時、彼はエンドラの言葉を伝えたわ。ゼノビア王国のグラン亡き後もカストラート海で人魚狩りが続いているのは嘆かわしいことだ、自分はグランのような過ちは繰り返さないし、そのためにも人魚が平和に暮らせる、人魚だけの王国をカストラート海に作ることを約束すると言ったのよ」

「それで、ついでに聖剣ブリュンヒルドの在処も教えてくれたっていうのか？」
ポルキュスは頷いた。
彼女の困惑ぶりはカノープスにも理解できる。アルコルがエンドラの使いならば、なぜ彼が偽の情報を流すなどするのかわからないからだ。
「だからと言って、私は帝国からの援助を断るつもりはないわ。せっかく帝国という強国が私たちに協力してくれると言うのだもの、せいぜい利用させてもらわなくてわね」
「アルコルは相当の曲者なんだろう？　利用するなんて言ってるけど、あんたたちが人間のことをそんなに知ってるとも思えねぇ。そううまくいくかね？」
「ポルキュスさまに何てこと言うの！」
「じゃあ聞くが、あんたらが人間の何を知っているって言うんだ？　長年、あんたたちの肉を不老不死の妙薬と信じて狩ってきたことか？　あんたたちの卵を孵すために親切に種をくれたことか？　それ以外にあんたらが人間たちの何を知ってるって言うんだ？」
「だから、私はあなたを呼んだのよ。解放軍の一員だったあなたなら、アルコルが来た時にどうすればいいのか、わかるのではないかしら？」
「何だって?!」
ポルキュスは微笑んでみせ、メリアーも手をたたく。
「アルコルは今日の夕方にこの島に来ます。十五日前に来た時は情報をもたらしてくれただけだったけれど、今度は何が目的かわからないわ」
「ちょっと待ってくれ。俺はその時にいなかったから状況が全然わからねぇ。先にそっちを説明してくれ。それが順番てものだろうが？」
「話したら、協力してくれるの？」
「協力してほしいのはそっちだろうに、ずいぶん強気なんだな」
「ここは私たちの島だもの、カストラート海のことは誰よりもよく知っているわ。海で人魚に逆らうなんて愚かなことだとは思わない？」
カノープスは思わず頭をかいた。ここで我を通してポルキュスらの機嫌を損ねるのは望むところではない。何より、彼の目的は人魚たちが持ち去ったブリュンヒルドの在処を探ることだ。
「それは、あんたの言うとおりだな」
「良かったわ、わかってくれて。
メリアー、ラアティラ、あなたたちはもう休んでくるといいわ」

「わかりました」
二人のニクシーが洞窟を出ていってからカノープスはポルキュスに言った。
「どうして人払いをする必要があったんだ？」
「アルコルの姿はみんなが見ていたけれど、彼と話したのは私だけだわ。それに、メリアーもラアティラも戻ってきたばかりよ、いつまでも引き止めていないで休ませてあげなくてはね」
「俺と二人きりになりたかったっては、言ってくれないのかい？」
「あら、私はもう卵を孵すつもりはないわ。あなたの種は若い子たちに分けてあげて」
「あんたたちときたら、男と見たら種馬としか考えねぇのか？」
ポルキュスはさっきのメリアーのように驚いた様子で彼を凝視した。「所変われば品変わる」とはよく聞くが、カノープスもここまで価値観の違う相手は初めてのことだ。
「だって、私たちの世界に男性なんていないのよ。なにもあなただって、ここにずっといたい、ずっといてくれるなんてわけではないんでしょう？」
「じゃあ訊くが、俺の前にこの島に来た連中はどうしたんだ？」
「みんな、隣の島まで送ったわ。この島は人間が住むには適していないそうよ。だから、私たちのことも知られないで済んでいるんだけれど、もしも住めたとしても、独りで暮らすのはつまらないでしょうから、やっぱり送り返したでしょうね」
「なるほど」
カノープスにはほかに言いようがなかったのでそう答えたが、ポルキュスの方は彼がそれで満足したものと思ったらしかった。
「それで、アルコルが初めてここに来た時の話だったわね」
それから、彼女の話を聞いてわかったことは、アルコルが見た目は若い魔法使いで、印象はアルビレオに似ているのだが、どうもアルビレオ本人ではなさそうだということ、言葉にも態度にも人魚を馬鹿にしているのが見えるということであった。
「そいつは本当にエンドラの使いなのか？」
「ええ、私も疑ってみたわ。でも、パルミラに帝国軍が来たことは確認できたの、彼はその点については嘘は言っていないのよ」
「じゃあ、あんたは奴の何が気に入らない？」

「彼の、と言うよりもエンドラの言うこと全てが、と言うべきでしょうね。人間たちは平気で嘘をつくし、私たちのことも冷酷に狩ってきた。私たちの娘たちが何人も殺されたわ、人間なんてカストラート海からいなくなればいい。それが偽らざる私たちの気持ちよ。そのためにならゾショネルにだって祈るわ、私たちにそれだけの力があればって、何度思ったかしれない」

ポルキュスが炎神ゾショネルの名を出した理由が彼にはわからなかったが、「グルーザの愛娘」と呼ばれる彼女たちには乾燥をもたらす炎の神は、魔神のように忌まわしい存在だということなのだろう。

「だけど、人間たちだってオウガバトルの後からカストラート海に住んでいるって聞いたぞ。一方的に出てけってわけにはいかないんじゃないのか？　あんたたちは人間が狩りをやめればいいんだろう？」

「呑気なことを言わないで。あなたは人間に狩られたことがないから、大切な家族を失ったことがないからそんなことが言えるんだわ」

「俺たちバルタンはあんたたちみたいに誰が相手でもガキができるってわけじゃないんでね。確かに狩られたこともないし、大切な家族を殺されたわけでもねぇが、数の問題じゃこっちも切実なんだ」

「本当なの？」

「そんなことで嘘を言ったってしょうがねぇだろう。あんたたちに姉妹なんて考え方があるのかは知らないが、さすがの俺も ――― いや、いい。事情も知らねぇのにあんたに八つ当たりするべきじゃないんだ」

「顔色が悪いわ、カノープス」

「嫌なことを思い出しちまっただけさ。大丈夫だ、少し休めば、治るから」

そう言いながら、あの時感じた全身の毛が逆立つような嫌悪感に包まれて、彼は吐き気さえ覚える。

ポルキュスはそんな彼を優しく抱きしめた。

人魚たちの上半身は人間や有翼人のような皮膚を持っており、下半身が見えなければ人間と間違えられることも珍しくない。

ただし、彼女たちのこめかみからは鹿の角、と言うよりも珊瑚のような角が二本生えており、マーメイドの時はともかく、ニクシーにもなると長く枝分かれするようになり、髪の毛で隠せなくなるので見間違えようもないのである。

ポルキュスからはカノープスが嗅いだこともない得も言われぬ香りが漂う。それは磯の香りではない。人間や有翼人の女たちが香水を身につけるように、人魚

たちにも同じような物をつける習慣があるのかもしれなかった。
「あんたたちにとっちゃ、男は種馬じゃなかったのかい？」
「でも、いまのあなたは子どものようだわ。それは男性も女性も関係ないのではないの？」
「だけど俺は雄だし、あんたは雌だ。それとも人魚は全部雌だから、そういう考え方はしないのか？」
「私にはそういう考え方がわからないわ。私にわかるのは、あなたが私たちの無神経な言い方に思い出したくないことを思い出させて傷ついているっていうことだけ」
「大袈裟な言い方はやめてくれよ」
そう言いながら彼はポルキュスを乱暴に押しのける。しかし、彼女もそれほど驚いた様子ではない。
「何にしてもアルコルがやってきたらわかることだ。俺に何ができるかもわからねぇが、あんたはどうしたいんだ？」
「もちろん、帝国の援助をもっと引き出すことよ。ブリュンヒルドは確かにあったけれど、あれぐらいの情報だけではお話にもならないわ。私たちが欲しいのは人間をカストラート海から追い出せるだけの力、戦力よ。でも、アルコルはきっとブリュンヒルドをよこせと言ってくると思うの、その時に負けないようにしたいわ」
「俺はあんたを加勢すればいいのか」
「本当はアルコルから約束を取りつけられればいいわ。だけど、そう簡単にはいかないと思うの。戻って相談してくるとか、そんなことを言うでしょうね」
「アルコルに剣を盗られる恐れはないんだな？　あんたは部下たちを信じてるかもしれないけど、人質でも取られたらわかったもんじゃねぇからな」
「人質なんて私は考えもしなかったわ。やっぱり、あなたは人間のことをよく知っているのね」
「あんまり褒められた気はしねぇけどな」
ポルキュスが笑い出したのでカノープスもつられる。だが、もしもそんな事態になれば、彼女だってブリュンヒルドにこだわりはしないだろう。もともと人魚たちには何の価値もない代物だ。けれど、帝国が聖剣を手に入れれば、カノープスたちがカストラート海にやってきた目的も潰える。それだけは避けなければならないことであった。
「でも、あなたはさっき、帝国軍となれ合うつもりはないって言ったわね。そのことはどうするの？」

「だからって、いまさら関係ないってわけにはいかねぇだろう？　乗りかかった船だ、ここは最後までつき合うさ」
「では、あなたにいつかお礼をしなくてはならないわね。私もいろいろな男の人に会ったけれど、あなたほど勇敢な人には会ったことがないわ」
「別に、俺は礼なんか期待しているわけじゃないんだから、気を遣うことはねぇさ」
「あら、それは長としては当然のことだわ。あなたにメリアーたちを助けてもらって、その上、まだいろいろとお願いしようとしているのだもの、お礼ぐらいしなくてはね」
「そういうことならば、考えておくよ」
「ええ、ぜひ、そうしてほしいわ」

洞窟の外に出ると陽はずいぶん高くなっており、アルコルの来ると言っていた夕方まで大して時間もないことがわかった。
「カノープス、話は終わったんでしょ？」
「よくわかったな」
「だって、お姉様たちが先に出てきてたもの、あなたも待っていれば出てくるだろうって思ったの」
「よくできました」
「子ども扱いしないでちょうだい。あたしだってもう卵を産めるのよ、種はいつもらえるの？」
「あのなぁ、人魚がいま、それどころじゃなくて、部外者の俺も巻き込まれてるんだよ、種どころじゃねぇの。後回し後回し」
もちろん、わざわざ巻き込まれるべくエニウェトック島までやってきたのは彼の方だが、そんなことは言わない。
しかし、そうとは知らないリエッシーの大きな蒼い双眸にたちまち涙が溢れた。人魚が幾つで成人するのかはわからないが、精神年齢はまだまだ子どもだ。その点ではかしまし娘たちといい勝負である。
「何もやらないなんて言ってねぇだろう？　ただ、俺の用事の方が先だって言ってるんじゃねぇか」
「本当に？」
「ああ。ポルキュスとの約束が片づいたらな」
「いいなぁ、ポルキュスさまは。カノープスに逢ったのはあたしがいちばん最初なのに」
「なに、呑気なこと言ってるんだよ。長っていうのは大変なんだぞ。おまえが代わろうって言ったって代われるものじゃないんだ」

「そんなこと、あたしだってわかってるわよ」
わかってないから、そんなことを言うのだと彼はリエッシーに言ってやりたい気がしたが、彼女も今度は泣いてしまうだろうと思って言わないことにした。
「なぁ、リエッシー。それよりも何か食わせてくれねぇか？」
「ええ、いいわよ」
そう言ったリエッシーの顔が嬉しそうに輝いたので、カノープスはちょっぴり後ろめたい気持ちになってしまった。
エニウェトック島でも人魚たちの食事は魚か海藻だった。しかし火を使わないので食べ方も単調なものだろうと決めつけていたカノープスは、人魚たちの見せた工夫にかなり驚かされた。
「どう？　美味しいでしょう？」
「ああ、これで酒でもあれば最高だね」
「人間の作る飲み物のことね？　あなたたちも人間と同じ物を食べるの？」
「ああ、ほとんど同じ物さ。俺は人間と一緒だった方が長いからな」
「じゃあ、これはどう？　この子、ソデワっていうんだけど、ソデワって私たちの中でいちばん料理が得意なのよ。それで、いろいろと新作を作ってくれるんだけど私たちにはどれがいいのかよくわからなくて」
「美味い料理にどれもこれもねぇだろう。美味い料理は何だっていいのさ。どれ？」
ソデワもニクシーだったが、受ける印象はメリアーともラアティラとも違っていておとなしそうだ。たぶん、彼女は同じニクシーであっても戦闘部隊に加わることはないのだろう。彼女は恥じらいながらカノープスに大きな巻き貝を差し出した。
「この前、人間の男の人が来た時にもお酒のことを言われたんです。それで聞いたことを思いだして作ってみたんですけれど、誰も飲んでくれなくて」
巻き貝には厳重に封がしてあった。カノープスが封を外すと、紛れもない酒精（あるこーる）の香りが立ち上る。酒を口にするのは何日ぶりだろう。〈漆黒の涙〉号はいい船だが、酒を載せていないという致命的な欠点があった。
彼はまず、予想以上に芳醇なその香りを気の済むまで堪能した。
「カノープス、どうしたの？」
「ちょっと黙っててくれ。何日も酒なんか見てもいないんで邪魔されたくないんだ」
「まぁ。どうぞ、ごゆっくり」

次いで一口だけふくんで舌の上で転がす。いつもなら一息にあおってしまうところだが、この匂いを嗅いだら、もったいなくなってしまったのだ。

塩辛さと生臭さが残っているのが海の酒らしいと言えなくもないし、それが嫌というわけでもない。

次いでもう一口。思っていたよりも辛い。それに意外と強い。解放軍を離れてからずっと酒断ちをしたせいか、酒精が身体中に染み渡っていくようだった。

「どうですか？」

「いい酒だ。ここでしか飲めないのがもったいないくらいだ。俺の友だちに酒好きがいるんだ、そいつにも飲ませてやれたらと思うよ」

「ありがとうございます、カノープス。作った甲斐がありましたわ。私にとっては最高の褒め言葉です」

「一気に飲むのがもったいないけど、この封は元には戻せないよな？」

「ええ。でも気にしないでください。私、また作ってみますから。それでまた、あなたに飲んでもらえたら嬉しいです」

「ああ、俺もそうしたいな」

それから彼は陽が西に傾くまで人魚たちの相手をして過ごした。メリアーにせがまれてシャローム地方について話したりもしたし、海の不思議な話を聞かされたりもした。

そうすることでカノープスが気づいたのは、小娘のようなマーメイドはともかく、ニクシーたちが話し上手の聞き上手であるということだ。だから、彼女たちと話をするのは楽しいことであった。

けれども、彼女らと話すことが楽しければ楽しいほど、彼はじきに訪れるアルコルのことを考えないではいられなかったし、洞窟から出てくることもなく、独りで思慮を巡らしているのであろうポルキュスのことも案じられた。

もしもソデワがカノープスの酒を飲ませたい友だちが人間だと知ったら拒絶するだろうか、それともやっぱり喜んで飲ませてくれるのだろうか。

彼にはそれを確かめる術もないのだけれど。

カノープスがポルキュスの洞窟に戻ると、彼女は岩にもたれて眠っているように見えたが、近づいていくとやはり寝ており、彼が来たことにも気づいていない。ニクシーに特有の鈍い金色の髪がほつれて頬にこぼれ落ちている。その頬がこけているのはやはり帝国が来てからの心労のためだろうか。

戦闘能力が高いと言っても人魚は有翼人のような好戦的な種族ではない。だからこそ、人間は長年、人魚たちを狩ることができた。もしも彼女たちに本気で反撃するつもりがあったなら、帝国の力を借りるまでもなく、人間はとうの昔にカストラート海から追い出されていたかもしれないのだ。

そう考えると、比較する対象がそもそも間違っているのかもしれないが、グランディーナの強さはやはり特筆に値すると言っていいだろう。だいたい彼女の場合、いくらこちらが無茶だと言ってもいまのポルキュスのように頬をこけさせていたことなんかないのだ。

「どっちにしても、リーダーをやるのも楽じゃねぇってことか。なんてあいつに言っても鼻で笑われそうだな」

「独り言なんか言って、どうかしたの？」

「あんたの寝顔を見ていたら、俺まで眠くなっちまった」

「あら、それは困るわ。アルコルが来た時にちゃんと起きていてもらわなくては」

「実はさっき、ソデワに酒をもらって、いい気持ちなんだ」

「いい気持ちになると眠くなるの？　よくわからないわ。ソデワはそんなにおかしなものを作ったの？」

「それだけうまい酒だったってことさ。こんなところで酒が飲めるなんて思いもしなかったよ。それに、彼女は料理も美味いんだからな」

「それは良かったわ。気に入った子がいたら、ぜひ種を分けてあげてね。いちばん若い子たちも十分、卵を産める歳になっているの、一人でも多くの人魚が生まれてほしいと思っているわ。お願いね」

思わず彼は、人魚たちがいったい幾つの卵を孵すつもりなのか訊きそうになって思いとどまった。いま、自分が心配しなきゃいけないのは人魚たちの卵の数ではなくてアルコルをどうするかだ。リエッシーにも言ったとおり、卵のことは後回しにすべきなのである。

「なぁ、ひとつ訊いてもいいか？」

「どうしたの、改まって？」

「もしもだぜ、もしも、人間が二度と狩りはしないと約束したら、あんたはそれでも彼らをカストラート海から追い出さなけりゃ気が済まないのか？」

「おかしなことを訊くのね。そんなこと、あなたにだって訊くまでもないことだと思っていたわ。それに強欲な人間たちがそんな約束をするなんて私には信じられない」

「だから、あくまでもしもの話さ」
ポルキュスは一応考えたようだったが、しまいには彼の予想どおり、硬い表情になって首を振った。
「やっぱりあり得ないわ。人間たちの方からどうしてもって言われれば考えなくもないけれど、そんなことするとは思えないもの。それに、これは千載一遇の好機なのよ。力のあるゼテギネア帝国の人間たちが、わざわざブリュンヒルドのことを教えてくれて、私たちに力を貸そうとまで言ってくれたのよ、彼らが何を企んでいるにしても、この機会を利用しない手はないじゃない？　それは、私だって人間を追い出すのに人間の力を借りるのは悔しいわ、だけど、こんな機会は二度と巡ってこないような気がするのよ」
「俺はあんたたちにはそういうのが似合わないように思えるよ」
「それはどういう意味なの？」
「あんたたち人魚は俺や人間たちと違って争いごとに向いてないと思う。でも、いまのあんたは無理に自分を煽ろう、追い立てようとしているように見える」
「そう見えるなら、私たちをそこまで追いつめたのは人間なのよ、あなたは止める相手を間違っているのだわ」
そちらには仲間が向かっているのだとは言いにくい。
そして彼の沈黙をポルキュスがどう解したのか、カノープスはついに訊くことができなかった。
ラアティラがアルコルと部下の到着を告げたのだ。

意外なことにアルコルは魔法使いらしくなく、小舟に乗って洞窟に入ってきた。部下の一人が櫂を操っており、彼は舟の真ん中に立っている。
彼の名を聞いた時から、ポルキュスの表情には緊張の色が走っていた。力づけようにも彼女は口で言うほどにはカノープスを当てにしているわけでもない。そのことが目に見えてわかるだけに彼は悔しかった。
あともう一日あれば、人魚たちと信頼関係を築くことができたかもしれない。だが、そんな時間がなかったことも最初からわかりきっていた。
「お久しぶりです、ポルキュス。あれからどうしました？　ブリュンヒルドは手に入れられましたか？」
声はアルビレオのそれとは違っていたが、転生した後で声が変わるかどうか、サラディンに聞き忘れた。
「ええ、ブリュンヒルドは確かにあなたの教えてくれたところにあったわ。だけど、あなたの言っていた状況とはかなり違ってもいたわ。なぜ、本当のことを

言ってくれなかったの？」
アルコルはカノープスを一瞥してから答える。
「わたしがおかしなことを言いましたか？」
「剣は堅固になど守られていなかったわ。そこにいたのはブリュンヒルドのことなど知らぬ存ぜぬ一点張りの頑固な人間だけ、私が行くまでもなかったわね」
「楽に手に入れられて、あなたたちには逆に幸運だったのではありませんか？　あなたたちがわたしの差し上げた情報で苦労したと仰るのなら責められてもしょうがありませんが、楽をしたのにそのように大袈裟に責められる覚えはありませんよ」
「そうね、ブリュンヒルドの時はあなたの言うとおりよ。だけど、あなたが教えてくれた船についてはどうだったかしら？」
「襲ったのですね？」
「もちろんよ。グランの言いなりになって私たちを狩らせた人間たちの長だと言うのですもの、償いはしてもらわなくてはね」
「それならば何が不満だと言うんですか？」
「そんな者、船に乗っていやしないではないの。一方の船では私の部下たちが殺され、もう一方の船には解放軍が乗っていたと聞いたわ。これはどう釈明するつもりなのかしら？」
アルコルは軽く肩をすくめた。
「カストラート海を行く船は一艘や二艘じゃありません。あなたたちは遅う船を間違えたのでしょう。それよりも、あなたの話が終わりならば、こちらの用事を片づけたいのですがね」
「ブリュンヒルドはあげられないわ。カストラート海から人間を追い出すのに力を貸してくれると言ったでしょう？　剣はそれが達成されるまで渡さない」
「ああ、それでわかりました」
彼が知った顔で高笑いを始めたので、ポルキュスの顔が怒りに歪んだ。
「先ほどからそこに控えている有翼人、どこかで見たと思っていましたが、反乱軍のカノープス＝ウォフルでしたか。ポルキュス、あなたは彼に、何か吹き込まれたんでしょう？」
「そんなこと、するものか。それにしても俺の名前も有名になったものだな」
「ふふふっ、知らぬはずがないでしょう？　あなたには一万ゴートの賞金がかかっているんですよ。金額の大小はともかく、ゼテギネア帝国に仕える身としては見逃せない相手ですからね」

アルコルの話しぶりから、カノープスはもう彼がアルビレオの転生ではないという確信を抱いた。
「それにしても一万ゴートってのは気に入らねぇな。グランディーナは最初から二万ゴートだったんだぞ、俺の値段が低すぎるだろうが？」
「あいにくと賞金の額を決めたのはわたしではありません。そのような文句はお門違いというものです」
「お待ちなさい、アルコル。彼はいまは解放軍の一員ではないわ、私たちのお客様よ」
「それは初めて聞きましたよ。あなたが反乱軍を辞めたんですか？」
「いまは人魚たちに協力しているんだ、おまえにがたがた言われる覚えはねぇな」
するとアルコルは悪意に満ちた笑顔を浮かべた。リエッシーが嫌な奴だと言ったはずだ。彼からはアルビレオと同じにおいがする。たとえ別人であっても、自分は高みに立ったつもりで他人を見下した、ラシュディの一番弟子と同種の人間なのだ。
「ふふふっ、それならばポルキュスに言ってあげましたか？　あなた方反乱軍に旧ゼノビア王国、グラン王の第二皇子、フィクス＝トリシュトラム＝ゼノビアが加わったということを？」
「いまはトリスタン皇子のことは関係ねぇだろう」
カノープスはつい声を荒げたが、彼を見るポルキュスの表情は顰面（しかめつら）に変わっていた。
「何を言いますか。反乱軍が我々ゼテギネア帝国を倒した後でトリスタン皇子の下で新しい国家を築くことは決まったようなものでしょう。その時、カストラート海を支配するのは誰ですか？　グラン王の遺児、トリスタン皇子以外にはあり得ないじゃないですか」
ポルキュスが激しい勢いでカノープスを振り返る。向けられる不信の眼差しを、払拭する言葉が見つからない。グラン王の人柄は知っていたが、これほど憎まれているとは思わなかった。
「こんな奴の言うことを信用するのか？」
「それならば、なぜ、グランの息子が生きているって、解放軍に加わったってあなたは言ってくれなかったの？　言えなかったからじゃないの！」
「トリスタン皇子はグラン王とは違うし、王があんたたちを狩れと命令したわけでもねぇだろう。冷静になってくれ。トリスタン皇子のことをあんたに話さなかったのは俺の落ち度だ。だけど、俺は人魚狩りなんてやめさせたいんだ、それも信じられないのか?!」
「あなたにはわからないわ」

彼女は呻くようにつぶやいた。
「グランがどれだけ私たちを苦しめたと思っているの？　あなたたちにとっては英雄かもしれないけれど、私たちにはただの人殺しよ、グランさえいなければってどれだけ思ったかもしれない。でもあなたたちは言うのでしょうね、グランが殺せと言ったわけじゃないって。私たちには同じことだわ、グランの長命にあやかろうとして大勢の人魚が殺されたことに代わりはないのよ、私の娘だって！　あの子はまだ三〇年も生きていなかったわ、私の可愛いラーニ、あの子はばらばらに刻まれて貪欲な人間たちに食べられたのよ!!」
「でも、あんたにだってわかっているはずだ。王はその名を使われただけであんたの娘や仲間たちを殺してない、あんたにはどんなに忌まわしい名前であっても王は人魚を殺させていないんだ」
ポルキュスの唇が戦慄(わなな)いている。
カノープスだって自分が理屈をこねているのに過ぎないことは十分承知しているつもりだ。だが何とかしてポルキュスに冷静になってもらいたかった。
「だからわたしが言ったでしょう？　反乱軍の者は必ずグラン王を擁護するだろうって。彼らには神にも等しい存在なんです。グランの名の下にどれだけの人魚が殺されたかなど、彼らには二の次なんですよ」
「アルコル、てめぇ！」
カノープスは彼を取り押さえようとしたが、それまでずっと気配さえ感じさせなかったアルコルの部下の一人が魔法を放ち、足止めされた。
そのあいだに彼から逃げたアルコルは、人を小馬鹿にしたような表情で物知り顔に話し始める。
「あなたのことはもっと詳しく知っていますよ、カノープス＝ウォルフ。古代高等有翼人バルタンの末裔で風使いとも呼ばれているそうですね。でも、実際のあなたはそんなに格好いいものじゃないでしょう？　親友のギルバルド＝オブライエンが旧ハイランド王国の軍門に降った時にあなたは軍団長にして親友の執った措置に不服を唱えてシャローム地方の片田舎に引っ込んで酒に溺れる生活を送っていたんですから。反乱軍のリーダーがあなたを迎えに来た時もあなたは二度も追い返している。おやおや、顔色が変わりましたね、図星ってやつでしょう？　あなたがその重い腰をやっと上げたのは、親友が反乱軍のリーダーと決闘していた時だ。わたしたちはあなたたち、反乱軍のことならば何でも知っているんですよ、あなたたちがいかにくだらない烏合の衆であるかもね」

「ふざけんな！」
「待って！」
ポルキュスの声はアルコルが来る前とはまるで別人のような冷たさで、彼を追いかけようとしたカノープスはその場に止まらざるを得なかった。
「カノープスと二人きりで話したいわ。しばらく、席を外してもらえないかしら？」
「どうぞ、お気が済むまで」
彼は小舟に乗り込み洞窟を出ていった。
「冷静になって話し合いたいってわけじゃなさそうだな」
「グランの息子のこと、なぜ、黙っていたの？」
「別に大した理由があったわけじゃねぇさ。単に忘れてたんだ。あんたがそんなにグラン王のことを嫌っているなんて思ってもいなかったからな」
「嫌ってる？　そんなに簡単なものじゃないわ、彼の名前なんて二度と聞きたくなかったわよ。疫病神？　魔神？　私たちにはそれ以上の存在だわ！」
「だったら、トリスタン皇子のことなんか話したってしょうがねぇだろう。それとも、俺が先に話していれば、あんたももっと冷静に聞けたって言うのか？」
「そんなこと、わかるものですか。違っていたかもしれないし、そうじゃなかったかもしれない。だけど、これだけは言えるわ。あなたが先に話していてくれれば、私はあなたに裏切られた気持ちにはならなかったでしょうね」
「裏切りだって？　いくらあんたがグラン王を憎んでいるからってトリスタン皇子のことを言わなかったってだけで、俺はそこまで大袈裟に責め立てられる覚えはないぜ」
「あなたの何が信じられるというの？　確かにあなたはリエッシーを助け、メリアーも助けてくれた。だけどそれだけじゃない。あなたから種をもらったわけでもないのに何を信じろと言うの？」
カノープスにはもはやいかなる言葉も思いつかなかった。
「ポルキュスさま！」
メリアーが洞窟に入ってきたのはその時だ。彼女は急いでポルキュスに近づき、カノープスの方を盗み見ながら耳打ちした。
ポルキュスは改めてカノープスに不信感に満ちた眼差しを向ける。
そこへ、まるで彼女らの行動を見ているかのようにアルコルが突然岸に現れた。

ポルキュスは驚くこともなく彼を見、アルコルもしたり顔で頷く。
「何があったんだ？」
カノープスが近づこうとすると、ポルキュスは水中から三つ叉槍を取り出して彼に向けた。彼のほかには誰もいない島で、たった一人で殺された隠者の死体が脳裏をよぎった。
それを見たメリアーが口の中で悲鳴を上げる。
「何のつもりだ、ポルキュス？」
「反乱軍が来たそうよ。誰がこの島の場所を教えたの？」
「俺はメリアーに連れてこられるまでエニウェトック島の場所どころか名前も知らなかったんだ、教える暇があるわけねぇだろう？」
「そうかしら？
メリアー、あなたは彼と来る時に誰にもつけられていないかどうか、気をつけていてくれたわよね？」
今度はメリアーが青ざめてしまった。
「申し訳ありません、ポルキュスさま！」
「馬鹿言え！　俺を疑うならまだしも、あんたは仲間を殺されてやっと帰ってきた部下を疑うのか？　人間たちに殺されそうになって、彼女がどんな思いをしてきたと思ってるんだ？　いい加減、目を覚ましたらどうなんだ?!」
「だけど、彼女が警戒しなかったのも事実だわ。この島の場所を人間たちに知られるなんて、誰であろうと私は全力で追い出してみせる」
「ですが、ポルキュスさま、彼らは、解放軍は敵ではありません。ラアティラもリエッシーも撃退されはしましたが無事に戻ったのです、彼らはカストラート海の人間とは違います！」
ポルキュスの表情が屈辱に歪む。まるで別人のような醜さだ。
「そう、あなたはもう、彼に種をもらったのね？
自分は卵を孵せるのだから彼を庇うというのね？」
「違います、ポルキュスさま」
「それならばなぜ彼を庇うというの？　卵はあなただけのものではないし、種もあなたが独り占めしていいものではないのよ」
「やめねぇか！」
「そのニクシーを弁護しても無駄ですよ、カノープス＝ウォルフ。人間たちは誰も知らないはずのエニウェトック島に反乱軍が来た、それだけであなたたちの裏切りを証明したようなものじゃありませんか」

「言いがかりだって言ってんだろう！　現におまえだってエニウェトック島に来てるじゃないか。誰に教わったって言うんだ？　何でもお見通しの帝国にか？　ポルキュス！　奴がこの島に来た時、あんたは何て聞いたんだ？　あんたはそれでも、メリアーよりも奴を信じるのか?!」

「もうやめて、カノープス。警戒を怠ったのは私の落ち度だわ、ポルキュスさまにそのことを責められても申し開きもできない。でも、私はあなたたちを信じてる、アルコルだってここに来られたのだもの、あなたの仲間にもきっと、この島の場所を知る手段はあったはずだわ」

「すまない、メリアー」

「いいのよ、私の正直な気持ちですもの。だから、これ以上、ポルキュスさまを責めないで」

「だけどな」

「見苦しいですよ、カノープス＝ウォルフ。あなたもいい加減、ご自分の裏切りを認めたらどうなんですか？」

「うるせぇ！　俺と人魚ばかりか人魚たちの仲まで引き裂かないと気がすまねぇのか？」

「これは奇妙なことを仰る。よそ者のわたしごときに引き裂かれるような仲など大したことないじゃありませんか。何百年生きていようと、しょせん、人魚なんかそれだけの存在だということでしょう？　違いますか？」

「そんなことを証明するためにそなたはカストラート海まで軍を率いてきたのか、アルコル？」

「誰ですか?!」

クージュラージュを漕ぎ手に舟が洞窟に入ってきていた。ほかに乗っているのはサラディンとランスロット、セダンダである。

「わたしの名はサラディン＝カーム、そなたが本当にラシュディ殿の弟子だというのならば、そなたには兄弟子ということになる」

「お目にかかるのはこれが初めてですね。初めまして、わたしは偉大なる賢者ラシュディさまの四番弟子、アルコルです。もっとも、わたしの存在はまだ公式のものではありませんがね」

そう言って若者は薄笑いを浮かべる。

「ならば、そなたに問う。パルミラの帝国軍はすでに降伏した。このまま降伏するか、それともまだ目的を遂行しようとするのか？」

「パルミラが落ちた？」

舟はさらに近づいてくる。その先頭に立ったサラディンの視線はずっとアルコルに注がれていた。
ランスロットがカノープスに気づいて合図を送ってよこす。
「そんなこと訊くまでもないでしょう？　あなたたちの足止めにもなれない無能な連中です、なぜわたしが彼らのように降伏しなければいけないんですか？」
「そなたはまだ若い。できるならば殺したくない」
「あっはっはっは！　アルビレオ殿に聞いたとおりの方ですね、サラディン＝カーム！　あなたに殺す気がなくてもわたしはその気だし、師からもあなたを殺していいとの命令も承っているんです、それでも殺したくないなんて甘ったれたことが言えるんですか?!」
「そなたにわたしを倒せると思っているのか？」
「アルビレオ殿にも倒せなかったのに、とでも言いたいのですか？　あの方がラシュディさまからどのような命令を受けていたか知れば、あなたの考えも改まりましょう」
「我が師ラシュディ殿にならばいざ知らず、アルビレオ殿に我が手の内をすべて見せた覚えなどない。我が弟弟子というより、話を聞いている限りではアルビレオ殿の弟子と言った方が正しいのではないか？」
「言わせておけば！」
アルコルが手を伸ばす。
舟はすでに岸に着いていた。ランスロットは素早く彼に斬りかかったが、すんでのところで避けられた。
遅れて彼らを襲ったのは強力な雹（ひょう）の嵐だ。
てっきり、それがアルコルから放たれたものだとばかり思っていたカノープスは、ポルキュスだと知って愕然とした。
雹は解放軍やアルコルばかりか、彼女の守るべきメリアーさえも巻き込んでいた。
「ポルキュス！　あんた、なんてことを！」
「来ないで！」
またしても三つ叉槍が向けられた。だが、その先は激しく震えている。
「近づくな、カノープス！」
サラディンが制止するのも聞かず、彼はポルキュスの槍を押さえた。
アルコルにはそこを狙われた。
雷の束が皆に襲いかかり、水中にいたポルキュスとメリアーはもとより、濡れた三つ叉槍を介してカノープスも火傷を負わされたのだ。
彼は槍を握ったまま海に落ちた。

セダンダが海に飛び込み、カノープスを捉まえる。
サラディンが魔法を撃ち、鎌鼬がアルコルを捕らえる。風の刃はその衣服ごと彼を切り裂き、足も止めた。そして今度は彼もいきなり消えたりはしなかった。
ランスロットとクージュラージュの二人がかりでアルコルを追いつめる。
剣で斬りつけられ、槍に貫かれて、アルコルが倒れる。サラディンが岸に降り立ったのはそれからのことだった。

苦い薬を流し込まれた衝撃でカノープスは目を覚ました。サラディンが安堵したような顔をし、同時に右腕から腹部にかけて猛烈な痛みが襲いかかる。気を確かに持っていないとすぐに失ってしまいそうなほどだ。
「ポルキュスとメリアーは ――― ?!」
「動くな。わたしは癒しの業を使うことができぬ、そなたは大火傷を負ったのだ」
「俺のことはどうでもいい！　二人はどうしたかって訊いてるんだ！」
そう口にするだけでも息が詰まるようだ。
カノープスは半身さえ起こして二人の様子を知ろうとしたが、右半身に力が入らない。

「メリアー、君が助けたニクシーはあいにくだった。だが、もう一人、ポルキュスはまだ息があって、君と話したがっている」
ランスロットが答える。
力強い腕がカノープスを背後から支えた。それがクージュラージュだったと気づいたのは彼と別れてからのことだ。
ランスロットがポルキュスを支えている。だが、カノープスにさえ、彼女が長くないことは容易に察せられた。
「ポルキュス」
苦しい息の下から呼びかけると、彼女は目を開いた。輝くようだった鱗は黒く焦げ、その身体にも痛ましい傷跡が残る。
「ごめんなさい、カノープス。私、あなたに、ひどい、ことを、言って、しまった」
彼がクージュラージュに助けられながら手を握ってやっても、握り返される力もない。
「気に、しなくても、いいさ。俺は、忘れっぽい、方なんだ」
「こんな、こと、頼めた、義理じゃ、ないのだけど、あなたに、お願い、したいの」

「何だ？」
ポルキュスはカノープスからサラディンに視線を移し、順にランスロットたちを見た。
「ブリュンヒルドを、あなたたちに、あげる。場所は、ソデワが、知ってるわ。その代わりに、私を、私と、メリアーを、あなたたちの、手で、海に、捨てて、ほしいの」
「捨てる？」
彼女は小さく頷いた。
「海に、グルーザさまの、元に、還りたい。メリアーを、殺して、しまった、私だから、グルーザさまには、許して、いただけないかも、しれないけど、少しでも、おそばに、いたいの」
「約束する。それに、俺は、トリスタン皇子に、掛け合う。もう、二度と、人魚たちを、狩らせないって」
ポルキュスはかすかに微笑んだ。けれども、彼女の首は次の瞬間には力なく垂れていた。
「ポルキュス！」
己の痛みもかまわずにカノープスは彼女を抱きしめる。失われていくぬくもりが彼女の紛れもない死を知らせていて、彼は誰にはばかることなく、涙を滂沱として流したのであった。

〈漆黒の涙〉号がエニウェトック島を離れたのはその翌々日のこと、一行は人魚たちの見送りを受けて、そのままカストラート海をも後にした。もちろん船には聖剣ブリュンヒルドが乗っている。
ポルキュスの言ったとおり、深い海の底に隠されていた聖剣は、人魚たちの気遣いもあって、鞘も水に濡れることなく守られていた。
しかし、サラディンも剣を鞘から抜いてみようとはせず、ブリュンヒルドは大切に〈漆黒の涙〉号の船底にしまわれたのだった。
エニウェトック島に引き続き、カノープスは怪我の治療に努めて休み、別行動を取ったサラディンたちの動きを知ったのは金竜の月に入ってだいぶ経ってからのことだ。
最後に海に還りたいと言ったポルキュス、その願いはサラディンたちの手でかなえられ、彼女とメリアーは海の腕（かいな）に抱かれて永遠の眠りについた。
マーメイドもニクシーも二人の死を悲しんだという。けれど、彼女たちにとっては陸の上で迎える死、最後にグルーザの懐に抱かれることのない死ほど悲しいものもないのだそうだ。

いつか海に還る日まで、人魚たちはその長き生を生きる。陸(おか)に生きる人間や有翼人たちと、その生にどれほどの違いがあるだろう。

タシャウズの港で再会した〈何でも屋〉のジャックは、解放軍がすでに荒鷲の城塞アラムートを陥落させたとの情報を伝えた。

そのころになるとカノープスの怪我もかなり回復しており、彼らはまたグリフォンに分乗して、アラムートの城塞を目指した。

ゼテギネア大陸を左右に分かつアラムート海峡、その要所、アラムートの城塞、旧オファイス王国の時代より難攻不落の要塞と言われた荒鷲の城塞を、解放軍がいかに落としたか。

その顛末は次に語られることであろう。